

戦後60周年羽村市平和啓発事業

**戦争体験記・平和への思い
の作文寄稿集
平和啓発講演会記録**



平成18年2月
羽村市

はじめに

先の大戦で、300万人を超える方々の尊い命が犠牲となり、東京においては、昭和20年3月10日の東京大空襲で、一夜にして、10万人ともいわれる尊い命が奪われるとともに、多くの人々が家族と引き裂かれました。

かけがえのない命を失った数多くの方々とそのご遺族のことを思いますと、深い悲しみを新たにするとともに、平和への誓いを新たにすることです。

終戦から60年の歳月が流れ、こうした悲惨な戦争の記憶が風化しつつありますが、私たちは、どのように時代が変わろうと、今日の我が国の平和と繁栄が、国民のたゆみない努力と、多くの方々の尊い犠牲の上に成り立っていることを、片時も忘れてはならないと思います。

戦争を体験された方々が高齢化していく中で、戦争の悲惨さを若い世代に語り継いでいく機会が減少していますが、戦争の悲惨さと平和の尊さを若い世代に語り継ぎ、悲惨な戦争の記憶を風化させないことが大切であると思います。

羽村市では、平成7年8月、戦後50周年にあたり、平和の誓いを新たにするため、平和都市宣言を行いました。

この宣言では、「私たちは、日本国憲法の平和の精神を守り、世界の人びとと手を携えて、戦争の防止と、被爆国としての悲惨な体験から、核兵器のない世界平和の実現に努めること、そして、平和と友愛の心を育み、この美しい郷土はむらを、未来に引き継ぐことは、私たちの責務である。」としています。

市では、この宣言を踏まえ、毎年、平和の企画展などを開催し、市民の皆様は、平和の大切さを改めて見直していただくための機会を提供するなど、平和意識の高揚を図るための平和啓発事業を実施しています。

本年度は、戦後60周年という節目の年にあたり、この平和啓発事業の一環として、戦争体験記と平和への思いの作文を募集したところ、19名の方が進んで執筆してくださいました。

この本は、お寄せいただいた作文を「戦争体験記・平和への思いの作文寄稿集」としてまとめるとともに、昨年8月に実施した「平和啓発講演会」の内容を記録としたもので、市民の皆様は平和の心を育んでいただくための礎になるものと確信しております。

最後になりますが、寄稿者の皆様並びに、講師を快く引き受け、貴重なご講演をいただいた西村信友氏に、心から感謝申し上げます。

平成18年2月

並木 心

目次

戦争体験記・平和への思いの作文（受付順・敬称略）

戦争は最大の環境破壊	大塚 勝江 . . .	1
淳子 - ある勤労学徒の死 -	徳永 薫枝 . . .	3
8月15日までの思い	清水 弘子 . . .	5
来し方行く末	古谷 肇 . . .	7
戦後60年の思い	高井 貞子 . . .	9
平和のためにできること	金子 亮太 . . .	10
それでも待った1週間	長瀬 保 . . .	11
戦争末期の思い出 元海軍一等兵曹	金子 豊 . . .	13
赤い雪がふった日に - 戦災体験を語り継ぐ -	漆原 智良 . . .	15
私の戦争体験 国民学校1年生の頃	高橋 玲子 . . .	17
9歳の夏	井口 タエコ . . .	19
私の戦争体験	中野 豊 . . .	21
秋津の平和観音	西村 信友 . . .	24
父の日記から知る戦争	大木 紀子 . . .	26
祖父の戦争体験	小田切 千恵 . . .	29
戦争の記憶をたどって - 良い子だったわたし -	高松 久美子 . . .	31
戦争と共に育った20年	野崎 衷 . . .	34
ふるさと銚子	樋口 和子 . . .	36
平和への思い ~ 9条をいかせ~	佐久 文雄 . . .	38

平和啓発講演会

実施概要	. . .	40
平和啓発講演会記録	. . .	41

羽村市平和都市宣言 . . . 47

あとがき . . . 48

戦争は最大の環境破壊

大塚 勝江

平成17年7月7日、牽牛織姫（けんぎゅうおりひめ）の1年1回のランデブーという雅な七夕の日に、ロンドンで同時多発テロが起こった。テレビの画面は、原形をとどめないほどグシャグシャになった2階建てバス、破壊された地下鉄車両が写し出されている。そして、死者49名、負傷者数100名と。

平成7年8月に「戦後50周年記念 語り継ぐ戦争体験」が羽村市から発行された。今年は60周年。この10年間、世界で、日本で、羽村市で何があったか。平和を維持するためどのような努力がなされているか。

ニューヨーク貿易センタービル破壊の生々しい映像が忘れられない9・11のテロ。死者4,000人以上。ブッシュ大統領は「これは戦争だ！」と叫び、イラク攻撃が始まり、戦いは終わり、暫定政府ができ上がった。日本の自衛隊は復興支援のため、サマワに駐屯しているが、テロの影が色濃く漂い現在に至っている。スペインのマドリードの駅のテロ。アルカイダの声明では、次は日本？をうかがわせる。日本では北朝鮮に拉致された人の一部が帰国したが、未だ生死不明の人、帰れぬ人、そして、北朝鮮の核問題。

羽村市では、市長が井上篤太郎氏から並木心氏へ変わった。教育長も野崎功市氏から角野征大氏へ。

私自身は28年間議員を勤め、平成17年春の叙勲で旭日双光章を受けた。平成17年5月20日、皇居で叙勲の式があった。私の目の前を通られる天皇陛下、微笑をうかべ、ちょっと前かがみで歩かれる陛下は71歳。お年より老けてお見受けした。陛下も、集団疎開や空襲と戦争世代を生き抜いてこられた世代なのだ。そして今年6月、戦後60年にして天皇・皇后お2人でサイパン島に慰霊の旅に出られ、バンザイ岬に立たれた。

「生きて恥ずかしめを受けるより死を！」と「天皇陛下万歳」と叫びながら断崖絶壁を飛び降りた老若男女の島民達。天皇・皇后の胸の想いは如何ばかりか察するに余りある。「欲しがりません。勝つまでは」「贅沢は敵」「兵隊さんのお陰です」の標語のもと、教科書は国定教科書「ススメ、ススメ、ヘイタイススメ」で始まり、音楽は「豪沈、豪沈、波又波の～」とか「エンジンの音、ゴウゴウと」と軍歌ばかり。英語は敵国語ということでなし。物心ついてから軍国教育の中にどっぷり漬けられ軍国少女になっていたのである。お茶もお花もお琴も習い事する暇があるなら兵隊さんに送る千人針や慰問袋を作れという教育。スカートはいざという時、行動がとりにくいと、モンペ・ズボンとなり、当時は常時着物だった母も、長着の着物を標準服という上下に着物を切り離し、上は筒袖、下はモンペの姿になった。愛国婦人会の襷（たすき）を掛けるオバサマ達が「銃後の守りは私達が」と焼夷弾を消す練習、竹槍の練習を呼びかけ、これに参加しないと「非国民」と言われ村八分状態となる。

「戦争反対の声をどうしてあげなかったの？」と、民主主義の中で育った今の子どもたちは大人に言うが、国の方針に対して反対の声を上げたら、「非国民」から思想犯となり、危険思想の持ち主ということで逮捕され、刑務所へ入れられてしまったという事実を子どもたちに伝えなければいけない。戦争が続き、兵器の原料の金属が不足してくると、「供出」と称してお寺の釣鐘から各家庭の鍋・釜まで持って行かれたのだ。

鹿児島県知覧町にある、特攻記念館。

「国を守るため」「愛する人・家族を守るため 私は行きます」

の遺言を残し、片道の燃料だけ積み込んで敵艦に体当たりしていった特攻隊の少年達。あどけなさの残る写真が並んでいるが涙なしでは見られない。

今、自爆テロのニュースを聞くと鳥肌が立つ。犯人の一人は18歳とか。この少年をマインドコントロールしたのは、宗教か。教育か。宗教だって、教育だって、人間が幸せに生きていくためにあるのではないか。

その人を無差別に殺し傷つけることが、正義だということはありません。その最たるものが戦争だ。戦争に聖戦などありません。

天災は防ぎようがないが、戦争は人が起こすもの。これからの戦争は核戦争となる。地球全体が消滅する破壊力なのだから。今年環境の年といっているが、最大の環境破壊は戦争だ。六カ国協議を手始めに世界中の国々が話し合い、反対意見、相手の立場にまず耳を傾け理解していこう。

世界でも、家庭でも、少数意見・反対意見が出せる環境にして、キレイな環境を作るよう努力したいと思っている。

淳子 - ある勤労学徒の死 -

徳永 薫枝

あの年（昭和20年）旧制高等女学校3年生の私達に夏休みはありませんでした。「ペンを銃に持ち替えよ」と叫ばれた時です。学徒動員の最年少組として、3月から工場へ出勤していました。軍服になる、という布を織る工場でした。親元を離れた寮生活でしたが、大正時代の女工哀史をふと思わせる過酷さは、非常時という名目に置き換えられて、名残をしっかりとどめていたように思います。

15畳の部屋に15人が起居し、少なく粗末な食事。激しい機械音と熱風と綿ぼこりの中の9時間労働です。

苦しい毎日であっても、夏休みは1日も無いと知らされても、不平は言いませんでした。純粹に日本の正義と勝利の日を信じていましたから。そして自分たちも、この戦闘に参加している、という誇らしさと使命感に燃えていましたから。

自動織機を1人4台割り当てられました。輸入の止まった日本で作る布といえば、再生糸か木の皮の繊維を加工したような糸で、こよりのように弱く簡単に切れてしまいます。

機械を止め、キズの箇所をほどこき縦糸を数百本つなぎ直します。泣きたくなくなるような作業でした。

その間に他の3台が謀反を起こし横糸の梭(ひ)は頭上をかすめて飛びます。その怖さは夢の中でうなされる程でした。私の隣の4台を受け持ったのが淳子でした。

3年東組の上杉淳子。色白で背が高く大きく見開いた眸と引き結んだ口元。頬の2つのほくろが印象的でした。彼女は入学当初から「学年きっての才媛」と噂され、同学年はもとより校内でその名を知らない者はいないほどでした。動員前、私とはあまり親しくありませんでした。出身地が離れていた事もありますが、彼女のなぜか憂わしげな眼差しが、私は気になって仕方がなかったのです。正直なことを言えば、彼女の美貌と、明晰な頭脳が私には眩しく妬ましかったのです。

隣り合って作業をするうち、急速に親しくなり固い友情で結ばれました。工場内は機械音のるつぼですから、会話は一切通用しません。互いの姿を時々目で追い、手話よろしく、励ましや労(いたわ)りのサインを送るのが精一杯でした。親しく話のできるのは、皮肉にも空襲警報が出て、寮の裏手の防空壕に避難したときだけでした。B29が豊後水道を北上し、空爆を終えて南下してしまうまでの3時間余りです。爆音に怯えながらも若かった私たちは、将来について語り合ったりもしたのです。

「私、戦争が終わったら、国文専門学校に行くつもり。淳ちゃんはどうする

の？」

私の問いに淳子はぼつりぼつりと語りました。

淳子の母は幼い時に病没し、父もまた、後添いの母と弟の3人を残して中国戦線で戦死したこと。継母は優しい人で学校の用務員をしながら淳子を女学校に上げてくれたこと。彼女の才を見込んで恩師達も支援してくれたこと等々。「私な、早う卒業して働くの。郵便局でも役場でもどこでもええの。そんでな、弟を大学までいかせるの。母さんやみんなに恩返しせんと。うーん、それから後は平凡な結婚か。うふう」

防空壕の暗闇の中で淳子は努めて明るく話すのでした。

動員3ヶ月目頃から、私たちの間に病人が出始めていました。発熱の後、申し合わせたように呼吸器系の病名がつけられて、自宅療養のため工場を去って行きました。

織機の間にしゃがみ込んでいる淳子を見かけたのは7月初めの頃でした。私が駆け寄ると、大丈夫、と言うように首を振って立ち上がるのです。それが毎日続くようになりました。私は淳子の制止を振り切って引率の先生に告げました。同室の友人たちは気付いていませんでした。「直ちに帰宅療養の事」と言い渡されました。

工場医のその言葉が終わらぬうちに淳子は思いがけないことを言いました。

「先生、お願いします。私を家に帰さんとして下さい。迷惑かけません。寝とれば治ります。」

医師も先生も驚いて顔を見合わせました。淳子の考えていることは私には判りました。

「母さんや弟を心配させとうないし——。」

彼女が帰れば家族の食糧事情を圧迫する事は明白でした。

病室に当てられていた寮の一部屋で説得されて淳子は枕に顔を埋めて泣きました。

翌々日、継母が淳子を迎えに来ました。

8月、日本は敗れました。熱病の後のような虚無的な数日が過ぎ、私たちは学校へ戻りました。田舎の町にも夜は灯が点り、校舎の窓辺からはセプテンバーソングが流れました。

けれども、あの誉れ高き才媛、淳子の姿は学校のどこにもありませんでした。コスモスの花の咲く頃、15歳の魂は天空さして駆け去っていったのです。郵便局にも役場にもお嫁にも行けませんでした。

夏休みの無かった年から60年、あんな時代でなかったら。あんな境遇でなかったら——。

淳ちゃん、あなたは、どんなに素敵なおばちゃまになっていたことでしょうか。

澄んだ秋空に向かって、私は今日も呼びかけてみるのです。

8月15日までの思い

清水 弘子

東京中野より稲田堤に越して1年あまりで、あの昭和16年12月8日の大東亜戦争が始まった。ラジオからは大本営発表という声が、ひときわ大きく聞こえる日々だった。

私は学校での怪我で、二子玉川の病院に入院。股関節炎症による高い熱で足は痛くて全然動かせず、ギブスをかけられてしまった。廊下のラジオから流れるニュースは、真珠湾攻撃から始まったと思う。小学4年の冬の出来事だった。戦争って何処でやっているのかとそのときは思った。軍艦マーチが鳴り、臨時ニュース、臨時ニュースが流れたものだ。

昭和18年2月11日の紀元節の式が終わって、家に帰ると、姉から母が死んだことを知らされた。大切な大切な母、誰を恨むわけではないが、薬も注射も何もない時代の結核で、さぞ苦しかっただろうと思い泣いた。

昭和19年の春、近所の正也さんが出征した。一人息子の正也さんだった。真っ黒な顔、真っ白な歯でにこにこ優しい正也さんだ。

「祝出征 正也君」と大きな字だ。お金持ちの家では此の出征旗を何本も大勢の人々が持って、駅まで送った。カーキ色の服を着て、寄せ書きいっぱい日の丸の旗を肩から掛けていた。白い割烹着の小母さんたち、子供たちも小さな日の丸の旗を振って、「正也さん万歳」と手を振って送った。そのときの顔が最後になってしまった。

姉が母の着物で作ってくれた防空頭巾と防災カバンに住所と名前を書き、肩から掛けて、父の印半てんのもんぺを履いて、学校まで1里の道を歩いて通った。その9月、母代わりの姉も母と同じ病気で死んで、物資が無く火葬するのに薪を持って行かないと葬ってもらえなかった。正也さんの家からリヤカー1台分の薪を分けてもらって、火葬場へ行くと、何処の人が「私たちに残った薪を分けてください、それとも、お願い一緒に葬って下さい」と泣いておられた。とてもできることではない。リヤカー1台分の薪は残ったかどうか分からない。悲しい出来事でした。

家の側に防空壕を掘ることになって、近所の人たちと父が一所懸命、穴を掘って、杭を打ち、板を張り、屋根板を乗せて土を盛って、防空壕に見えないようにした。防空団の人が、見回りに来た。火叩やバケツ、スコップ等を調べて行く、父は親方の家の強制疎開の手伝いで家にはいない。義子姉ちゃんは駅員なので、サイレンがなるとキップとお金を持って逃げたとか、私は妹と2人毎日真っ暗の中で怖い訳のわからない日々を過ごした。洗濯も夜にして、家の中で干す。妹は怖いので側から離れられない。この淋しさは母や姉のいない悲しみとで倍になった。涙で顔はくしゃくしゃだ。泣かないの、泣かないのと涙を拭きながら過ごした。

6年の3学期には、菅原電気軍需工場で挺身隊で働いた。朝は武道の訓練で、薙刀で面、小手、突き、大きな声に裸足で土埃がもうもうと立つ。男子は玉川の松林から根を掘って松根油を取るための作業、先生と軍の人たちがついていった。銃剣術、薙刀は毎日続いた。私達の仕事は無線用コードの防水液を紙やすりできれいにした。3時になると短麺に大根や葉の入った雑炊が丼1杯出された。黒いアクが浮いていても、お腹が空いていたから美味かった。後2時間、一所懸命働いた。

外に出るともう薄暗い道を夢中で友達と帰る。妹がお腹を空かして待っているから。戦争中は、食べ物は正也さんの家で、草むしりや畑の仕事を手伝って、粉や麦芋などをもらったので困らなかった。空襲などで火を使う事ができず、それが一番困った。

また来た、B29のブルン・ブルンと地面が揺れるような唸る音、ラジオもけたたましく「空襲警報発令」。学校は生徒を家に帰す。私は家までの道を確認米ちゃん、良ちゃん、時ちゃんと4人で汗びっしょりで、顔は真っ赤で周りは田んぼや梨畑ばかりで家の陰が無い道、途中で艦載機グラマンの機銃掃射に遭った。稲藁の陰をぐるぐると逃げ回った。危ない川の中に飛び込んだ。バリバリという音、大丈夫と声掛け合って恐る恐る顔を上げると、機上の兵隊はニヤニヤ笑っているのがはっきり見えた。あの憎らしい顔、忘れることはできない。命からがらに家に着いたときは動けない。誰もいない家の中、1人ふるえながら着替える力も無い。

電波妨害のアルミの薄いテープが、電線や南武線の線路の上にもキラキラといっぱい、風で動けばシャラシャラと奇妙な音をたてる。だんだん夜昼なく空襲が激しく、防空壕の中に居ることが多い。東さん、奥村さん親子と私たち姉妹でいっぱい。小母さんたちが昼間作った物を毎日食べる。正也兄さんはニューギニアで戦死の報、遺骨の箱の中は何が入っているのか分からないほど軽い。毎晩東京、川崎、八王子と真っ赤な空、私は中野の友のことを思った。大丈夫とつぶやいた。

8月6日、広島で恐い爆弾を受けて大勢の人々が死んだと伝えられた。数日後、長崎にも。何時それが原子爆弾と聞かされたか覚えていない。

壕の中の人たちは、サイレンが鳴る度に恐ろしさにおろおろした。8月15日、東さんのラジオの前に集まった。暑い日だ。「天皇陛下」のお言葉で皆、身動きもできず、涙流しました。何のため、お国のため、正也さんや遊んでくれた田口のお兄ちゃんも7つボタンの予科練に希望を燃やし、胸を張って出発したの、今、何処にいるのと思うとむなしく悲しい8月15日だった。今でも野良着で正也さんの遺骨を持ったお婆さんの悲しみの姿が目の中にある。大切な1人息子さんですもの。

来し方行く末

古谷 肇



この世に生を受けて64年余、我が人生を振り返ってみると、幼な心に生々しく覚えているのは、先の大戦で羽村へ疎開してきた当時の記憶と、農林一号のサツマイモにまつわる思い出だ。この芋は水気が多く味がなく、天日干して粉にし、団子状に丸めて来る日も来る日も飽きずに食べた。食糧事情が極端に悪かった時代だから、口に入るだけ我々の世代は恵まれていたのかもしれない。

最も抵抗があったのが学校で出された給食の脱脂粉乳で、ジュラルミンの器に濃厚な油が浮かんでいた。生理的になかなか受け入れることができず、先生の際を狙っては、渡り廊下の奥にあるトイレで何度も吐いた。小学生時代のこの時の印象が強烈だったので、私は今でもこの種の飲み物が最大の苦手だ。

我が家は目黒区東町（現・目黒本町5丁目）24番地にあった。借家で家庭は両親と姉と私の4人。父は銀座の名の通った企業に勤め、何一つ不自由なく暮らしていた。父が北支事変で召集礼状を受け、外地に赴いてから、生活は一変した。羽村育ちで内向的な母はこの地域の人たちと打ち解けず、物質面でも実家への支援を求められる状態ではなかった。その上、妹を身籠（みごも）っていたから、精神的不安もあったろう、目黒の地で孤立無援。今その心中を思いはかると、察するに余りある。それでも一旦は出産のために羽村の実家へ戻ったものの、戦況は日増しに悪化してきて、昭和19年、羽村への疎開を余儀なくされた。

当時は今のように機能ある交通体制でなかったから、東急目蒲線（現・東急目黒線）の武蔵小山駅から実家まで、1日がかかりだった。立川駅に到着すると、母は手荷物を携えてきた疲れと、私たち子供への心労、実家まであと1時間という安堵感から、思わずホームへへたり込んでしまった。電車から降りると、地下道があり、青梅線のホームは通路の先にあった。慌しく行き交う人々は、皆荷物を抱え、粗末な身なりで、あちらこちらに物乞いをする人たちがいた。

時に母は30歳半ば。晩年になって、私の書棚にあった藤原てい著の『生きる』や『家族』や『流れる星は生きている』を読んでは、いつも泣いていた。藤原ていさんが3人の子を抱え、北朝鮮で生と死の間をさ迷い、艱難辛苦（かんなんしんく）の拳句に故国へ引き上げてきた体験談は、労苦の度合いこそ違え、「生きることの尊さ・生への執着・悲哀」等々、母にとって自らの体験がダブって見えたのだろう。

おもちゃの木組みのような羽村駅舎、家は駅周辺に疎らにあるだけ。出迎えの祖父が引くりヤカーに乗せてもらおうと、デコボコした砂利道を西に向かった。畑と桑畑がどこまでも続き、麦藁屋根の農家が点在していた。農家の庭には、

犬、鶏、馬、牛、山羊、豚などがいた。珍しいのでリヤカーの上で立ったり座ったりした。やがて、招魂社（現・護国神社）と広いグランドのある小学校（現・羽村1中）へ出て、緩やかな坂を下ると玉川神社があり、実家は直ぐ近くだった。



母の実家は、昔から当時では知られた家柄だったという。小作人が何人もいて、母も少女期までは裕福に暮らしていた。しかし、『好事魔多し』の例えのように、若くして母親を亡くし、父親も病気がちで農作業に従事することができず、戦後、追い討ちをかけるように断行された農地改革（国が、地主から農地を強制買収して小作人に売り渡す。この結果、地主階級は消滅し、旧小作農の経済状態は著しく改善された。）が、多くの農家や母の実家に壊滅的なダメージを与えた。

麦藁屋根の屋根裏は一間で暗く、私たち母子はこの住処（すみか）に寄り添うようにして寝た。小さな裸電球が1つ、四方は蚕の棚が張りめぐらされ、蚕は終日ガサガサと音を立てて動き回っていた。夜目にも大きな毛虫を思わせる蚕は、熟睡している私たちの煎餅蒲団の上によく落ちてきた。怖くて、怯えうなされ、毎晩のように寝ぼけては小便で蒲団を濡らした。



こののどかな純農林地帯だった羽村にも、B29は来襲した。空襲警報が鳴り渡ると、薄暗い裸電球に黒い布を被せて、息を潜めて飛行機が飛び去るのを待った。

実家の庭先の一角は竹林になっていた。ゆずの大木の根元は深い防空壕で、その防空壕によく飛び込んで、まんじりともせずに恐怖の夜を明かした。幸い町内に被害はなかったが、高い煙突があった西隣の西玉社という製糸工場（現・羽村西小のところ）は格好の標的にされ、機銃攻撃を受けて犠牲者が出た。

後年、幼児期を過ごした目黒界隈が懐かしく思い出され、度々、立会川緑道や円融寺や林試の森公園などを歩いた。地元の古老の話によると、終戦間際の東京大空襲で、私たちが住んでいた付近一帯は阿鼻叫喚（あびきょうかん）と化し、目黒区内で153人の尊い命が奪われたという。

あれこれ臨場感溢れる話を聴いたり、羽村市図書館所蔵の『東京大空襲・戦災誌』第1巻～第5巻（東京空襲を記録する会編）も読んだりしたが、もし、目黒からの脱出が数ヶ月遅れていたなら、私たちの存在はなかったことになる。

「来し方行く末」を考えるには、まだ時期尚早とを感じるが、残された人生をより大切に生きていこうと思っている。

戦後60年の思い

高井 貞子

「海征かば水清く屍、山征かば草むす屍 大君の辺にこそ死なめの顧みはせじ」の歌を6月初めのシルバー会のカラオケで聞きました。久し振りの歌にあのむごい時の流れを思い出しました。

昭和18年2月頃から、青梅市根ヶ布にある高峰山梅華林天寧寺に住んでいました。この世からポツンと離れた生活でした。山門の前にお住まいの方々は、割烹着姿で千人針や防火訓練に励んでいました。軍部から、寺は本堂全部を修練所に貸すようにとの通達があり、私たちは庫裏住まいになりました。本堂は、修練生達の訓練の場になりました。方丈としての生活はどのような状態であったのでしょうか。彼等は、まだ高校生ぐらいだったようです。

中雀門と本堂前の広い庭は訓練の場でしたが、どのような訓練がなされていたのか分かりません。時には、本堂前の張り出しの間で大きな声が響き、何かと耳をそばだてたこともありました。教官が4人いらして、むずかしい教育者でした。この方々とのお付き合いは全くありませんでした。裏の霞ヶ池を囲む山の一つ、蔵の横にある山に横穴が掘られ始めていました。かなり深かったようです。修練生たちは、この労働力になっていました。この穴は陸軍関係の機密の品々を収納する倉庫のようでした。その穴は今でもそのままになっています。修練生たちの日々の生活はどのようなものであったのでしょうか。ただ、庫裏の土間は占領され、大釜は生徒達の食事に使われ毎日大変な賑わいでした。本堂前の広場で点呼を取ったり、訓辞を聞いたりしていた姿が目に浮かびます。まだ少年たちでした。夜、床に就く時はどんな状態であったのか。集合室では個人的な生活は許されず、生徒たちの心の中はどうかであったのでしょうか。

昭和20年8月15日ポツダム宣言受諾。修練生共々、玉音を聞きました。

それからの修練生達の動きが早かったこと。あっという間に姿が見えなくなりました。教官の姿も同時に消えました。土間にあった米、野菜類は全部無くなっていました。後で聞いた話によると裏山の小道を荷車に積まれた荷物が生徒たちの手によってどこかに運ばれたということです。それっきりで、方丈にも何の挨拶もありませんでした。

それからあの敗戦の最中を通り過ぎて、やっと平和なときを迎えました。忘れえぬ修練生たちの姿に、時と重ねて当時の方は、今は元気に自分の人生を歩んでいらっしゃると思います。

どうぞ当時の有りようを今に伝えてほしいと思います。

平成17年7月26日

追記の形になりますが、思い出した歌があります。以下です。

「橋の袂に街角に、千人針の群れ心をこめて運ぶ針」

女性として、あのむごい戦中の生活の辛さを思い出します。

平和のためにできること

金子 亮太

ぼくは、5才のとき、じいちゃんが太平洋戦争のとき島を守るために戦ったロタ島に、お父さんとじいちゃんの3人で行った。そこには、砲台があり、病院として使われていた大きな洞くつがあった。砲台は、すごく大きくておどろいた。洞くつの中は、暗くて、こんなところが病院だったのかと思った。

その後、4年生の秋に10才の誕生日プレゼントとして、ぼくとお父さんで広島旅行をし、原爆資料館と原爆ドームを見た。小学生が火傷をして、服がボロボロになっている様子や、一升ビンが、グニャグニャになっていた物を見て、原爆はとても怖いものだなと思った。お父さんは、ぼくに、たくさん見てほしいというように、ぼくに、いっぱい説明した。ぼくには、お父さんが戦争とは、こんなに恐ろしいものなんだよと言っているように思えた。次に原爆ドームを見た。原爆ドームは、ぼくたちに、原爆の恐ろしさを見せつけているようだった。ぼくはお父さんと広島に行って、色々、勉強になったと思った。

じいちゃんは、今、74才で毎日農業をしている。元気で野菜や米作りをしている。時々、食事のときに戦争の体験を、少し悲しそうに、ぼくたちに話ししてくれる。家族でキャンプに行くとき、じいちゃんを誘うと、「戦争のときにつらいキャンプをたくさんしたからいきたくねえや」と言う。僕たちが食べ物を残すと、戦争のときは、食べ物がなくて草を食べた話をする。じいちゃんは、食べ物をとても大事にする。

ぼくにとって、ロタ島と広島に行ったことは、とてもいい経験になったと思っている。平和というのは、すごく大事だなと思った。今、ぼくたちが住んでいる日本は、平和でとても豊かだけれども、外国には、いろいろ問題もある。平和になってほしいのは、国内だけではない。世界中の人たちが戦争をしないで、豊かで、楽しく生活できるようになってほしい。だから、ぼくは、ユニセフ募金とかを進んでしていくべきだと思う。

じいちゃんは、ときどき、「亮太が大人になったころ、また、戦争が起きなければいいな」と言う。そんなことにならないように、ぼくたちは、しっかり勉強して、二度と戦争を起こさないようにしなければいけないと思っている。

ぼくは、中学に行っても、平和について、関心を持っていきたいと思う。

* 金子亮太さんは、平成13年2月に亡くなられていますが、ご家族の希望により掲載させていただきました。

それでも待った1週間

長瀬 保

真っ赤に染まった東京の空が入道雲のような黒煙に包まれて視界から消えていきました。東京は、私の家は、父や母は大丈夫だろうか、今朝、出て来た家が、家族の顔が目に見えなくなります。まんじりともせず一夜を明かす私たちの頭上を、B29がひっきりなしに東京の方に飛んで行きました。

昭和20年3月9日東京大空襲の夜、私は千葉の船橋市で一夜を明かしたのです。

明けて10日の朝、東京は本所東両国の自宅に帰るため総武線に乗りましたが、市川から先、東京方面は不通で線路伝いに歩きました。平井から亀戸にかかると町並みはすっかり焼けて、煙さえもあまり見えず、文字通り焼け野原に足も渋りがちです。前に進むのが、我が家の現実を見るのが怖いのです。

傾斜した線路の土手に、ここまで逃げてきたのでしょうか。爪を立てて登る格好で死んでいる男女不明の死体が数を増してきました。中でも手も握り合い、2、3人の子供に覆いかぶさるようにして死んでいる親子連れが涙を誘いました。動いているものと言えば焼け焦げたぼろぼろの衣服をまとい、私とは反対の市川方向に力なく歩く罹災者の群れと、そこそこにある電柱が長さ1、2メートル位になって、ぼそぼそ燃え煙るくらいのものでした。

それでも自分の家だけは、自分の家族だけは大丈夫だと言い聞かせ、言い聞かせ歩いたのです。両国駅に辿りついておそろおそろ我が家の方を眺めました。案の定なにもありません。家の西側にある両国国技館の丸い大きな屋根だけがぼつんと立っていました。

昨日までの我が家の前に立つと、風呂場のコンクリートの上に風呂桶のヒョットコ釜だけがゴロンと横になって…。不思議と涙も出ませんでした。とりあえず庭の防空壕の中で家族の帰りを待つことにしました。昼間は焼け跡を歩きまわり、夜は壕の外に立って家族の帰りを待つ毎日が始まったのです。

1日、2日は人影もまばらで、特に夜など誰もいません。それでも怖さなど感じませんでした。帰って来た近所の人のお話では、逃げ出して表に出て、右(風上)に行くか左(風下)に行くかで生死が定まったといい、私の家族は小船に乗って水路から隅田川に出たらしいと話してくれました。しかし、空襲時は川の水面が見えないくらい火が這っていたといい、それを裏付けるように川面には水面から出ている部分は全部焼け、中が水びたしになった大小の舟が浮いていました。

3日目の朝、国技館から新しい火の手が上がりましたが、誰も消しに行く人はありませんでした。4日目頃から兵隊さんが来て死体をトラックで運び始めました。鳶口で引き上げるのですが、その数が多く相当の日数がかかったと記憶しています。長いような短いような防空壕での1週間でしたが、ついに両親

と弟は帰って来ませんでした。

遺体も見つからぬまま死亡届を出しましたが、ある日、ひょっこり帰って来るといふ夢みたいな願いは今でも持ち続けているのです。16歳の春の悲しい出来事でした。

戦争末期の思い出 元海軍一等兵曹

金子 豊



5年8ヶ月の現役中、東南アジアやマーシャル群島から北千島のはずれまで、戦地を巡り、気象の受信暗号の翻訳と天気図の作成を独学で覚えたお陰で、前半を航空部隊、後半は艦船の生活に変わったのが、今にて思えば一生の転換点であったような気がする。

戦況が悪くなってからの乗艦は、潜水艦という嫌な相手に最初から魚雷を見舞われ、軽い火傷で命拾いした。再度の配属は750トンの海防艦、もちろん小粒でも攻撃の能力は充分あり、対馬周辺の警備を手始めに船団護衛の任務に就いたのは終戦間近だった。門司港から直行すれば近くても、沖縄を失った後、5隻の速力の遅い船団と一緒に朝鮮半島沿いに北上しかなく、青島入港前には前夜からつきまとった哨戒機の爆弾2発で肝を冷やしはしたが、山のような岩塩を、夜を徹して商船に積み込み出発を待った。一兩日後、大連経由で門司港に戻るには危険なコースを南下するしか策がない。すでに内地へ運べない大量の満州大豆の山を横目に、例の印象的半円形の波止場を離れ、3隻の護衛艦で商船を囲み、洋上訓練を重ねつつジグザグと南下し、2日目の朝を迎えた。

午前の気象無線受信時、突然、対空戦闘の号令が飛び込み、配置の見張所に一気に駆け上がったが、霧が立ち込め、真上は青空望遠鏡で見回しても商船のマスト上部だけが見え隠れし、機影はおろか爆音も聞こえず不思議に思った瞬間、商船の付近から海水と岩塩の混じった水柱が二本あがって爆発音が2発聞こえた。結局、命令は誤りで、対潜に切り換わった直後、今度は先頭の当艦に魚雷1発、艦の後部から、プシューと言う大きな音に度肝を抜かされた。近くの雷はゴロゴロとは聞こえぬ原理と同じか、ドカンと言う爆発音は聞こえず、魚雷と後部爆雷庫の誘爆で艦の3分の1がザクロのようにめくれ上がった姿を一瞬見た気がしたが、何が起こったのか直ぐには判断できなかった。退艦の号令があったのか、耳にする余裕がなかったのか、屋上から滑り落ち、もしかすると爆風と傾斜で海に投げ出されたのか気付いたときには、艦の姿は無く、つかまる浮遊物もなしに20人程浮き沈みしていた。

冬の北千島や玄海灘に比べれば水温も適度という運の良さを米艦に感謝する訳にもいかず、腹に据えかねての泳ぎであった。軍歌を歌おうとの声と静かに救助を待てとの声が入り乱れるうち、誰もが次第に無口になり、異様な空気に包まれる頃には、体力のない者が水面から順次に消えていく。霧も晴れ、見通しは少し良くなったが、近くに僚艦の姿はなく、陸地か島が手に取るように見えるだけ。潮の干満の折、沿岸は流れが早くなり、目の錯覚が起き易いとは教えられていた筈なのに、泳ぎの自信を頼りに我々から離れ、戦後生存の確認されない戦友もいた。魚雷での沈没経験は2回目、或程度度胸はあっても、次第

に足首の硬直が膝から腰に移り、浮いているのがやっとの状態で、動かせるのは手と首だけになり心細い時間が過ぎて行く。

一旦見えなくなった僚艦の掃海艇が再び現れた時は、薄れた意識にもかかわらず生き延びたい気だけが頭の中を空回り、我々をスクリューに巻き込まないようにゆっくり近寄りロープを投げ込む迄が長いこと。下半身は棒のようになり、自由が利かず、投げられたロープにつかまっては見たものの、握力がなく、先が輪になっていない1本のロープが恨めしかった。たっぷり水を吸った衣服と靴の重い体は支えきれず、かなりの深さにずり落ち、手だけでもがきながら水面に出たところ、艦の下士官が吃水（きっすい）まで降りてきてロープを体に巻きつけたところで意識はぷつりと切れた。甲板に引きずり上げられ衣服を全部脱がされるまで、痛みや苦しみはもちろん、助かった嬉しさなど一切感じる余裕もなく、不思議と頭の中が真っ白であった。この感覚は過去に台湾の大地震で潰され引きずり出され、気を失った時とよく似ており、人の死はこんな風にじわりとやってくるのかなと正気を取り戻してから感じた。

温水摩擦を終わり、同じ格好で寝かされた同僚も見え、収容作業が何時終わったのか、雷撃から多分2時間余りたった後、全速で南下する艇を気が抜けたように眺めているだけ。その内に強烈な寒気を感じてガタガタ震えだし、肩を借りて兵員室へ降りる惨めな姿に我ながらがっかり。うねりだけで波をかぶる程でもない泳ぎで海水を飲まなかったが、カラカラの乾いた喉に出された白湯の味で一寸先に迫った暗い洞窟を抜け出し、生きている実感をやっと取り戻すことができた。

生と死の紙一重の境目をさまよった後に拾った命は、これからも大事にしなければとつくづく思う。顧みれば、沈没は現北朝鮮串山角辺りか、折角の任務も未完了のまま、終止符を打ったのは残念だったが、救助に当たってくれた掃海艇の方々には心から御礼を申し上げると同時に、我七二号海防艦の戦死者百余名のご冥福を祈る次第です。復員を経て戦後60年、87才を目前にした私の人生にとって、昭和20年7月1日が一生の節目として忘れることができない思い出となって居ります。

赤い雪がふった日に - 戦災体験を語り継ぐ -

漆原 智良

平成17年3月10日 —— 私は、東京両国にある江戸東京博物館の講演会場の壇上に立っていました。

太平洋戦争の最中(さなか)、昭和20年3月10日未明。東京都下町市街は、米軍B29戦略爆撃機、約300機による空爆を浴び、一夜にして尊い10万人以上の生命を奪われてしまったのです。

あれから、満60年の歳月が流れました。

その日、「戦災孤児の小さな歩み」という演題で、「戦災と疎開、戦後の歩み」などを語っていたのです。

「…太平洋戦争は日本が敗れて終わりました。しかし、その後も朝鮮、ベトナム、イラクなど、戦争は世界各地で起こっています。戦争が不条理で、悲惨で、残酷なものであることを痛いほど知っている私たちは、いま日本は平和だ、などと決して手放しでは喜べません。戦争の陰で泣いている、多くの人々の痛みが映し出されてくるからです」

会場は満席。熱気に満ち溢れていました。

私は昭和9年、東京・浅草の千束町(せんぞくまち)(現・浅草5丁目)で生まれました。

私が、小学校2年生になった昭和16年12月8日。日本軍はハワイの真珠湾を奇襲攻撃し、太平洋戦争がはじまりました。

ところが、1年と経たないうちに日本の戦況は怪しくなってきたのです。

昭和18年になると、アメリカの偵察機が東京上空に現れるようになり、「日本本土決戦」の噂さえ流れるようになりました。東京では、灯火管制が布かれ、町内では、各隣組ごとに結束し、連日防空演習に取り組むようになりました。

軍部から「もし、敵軍が上陸してきた時、竹槍を手にして立ち向かって行け！」と、命令が下ったのです。そこで、藁で作った人形を敵軍と想定し、槍で突くという演習が行われるようになりました。演習は、銃後を守る女性たちに課せられたのです。

母は防空頭巾を被り、モンペをはき「大日本国防婦人会」のたすきを肩に掛け、連日演習に参加していました。もし、演習に参加しないとすると隣組長から軍部に報告され、「非国民！」としての屈辱的な扱いを受け、配給の物資をもらえなくなるのです。

ところが、か弱い母は、そうした厳しい演習に耐えることができませんでした。私が、国民学校4年生になって間もない、昭和18年4月末。母は竹槍演習の最中に、突然倒れて意識を失いました。それから、10日程のち、満29歳の若さで天国へ旅立ってしまったのです。

B29による東京への空襲はいちだんと激しさを増してきました。昭和19年7月。5年生の私は、父の実家である、福島県猪苗代町の祖母のもとに縁故疎開をしました。

父は、陸軍省関係の会社に勤務していたことから、出征兵士として召集だけは免れていました。だが、仕事の関係上どうしても東京の地を離れることができませんでした。

太平洋戦争は泥沼化し、戦況はますます厳しくなり日本軍は次第に追いつめられていきました。本土決戦も時間の問題となりました。学校長からは「きみたちも、お国のために身を捧げる覚悟で戦うように…」と命令が下りました。

学校では食糧不足を補うために、毎日イナゴ取り、ワラビ取り、荒地開墾、木材運び、馬糞拾い、縄ない…などの作業が行われるようになりました。

これらの作業は上級生達と一緒にになって取り組む班単位や、地区単位の共同作業として行われていました。東京育ちの私は、いつも規定量に達しませんでした。すると、班長や、地区長が代表として呼ばれ、先生に怒られ、殴られたのでした。その仕返しが、私へのイジメとなり、「そかいっぺは、だらしがない」「おまえはタダ食いするきだんべ」「怠けていると戦争に勝てないぞ」と、ののしられました。

イジメに耐えられなくなった私は、父に便りを出しました。父は心配し猪苗代に飛んできてくれました。「東京は赤い雪（焼夷弾）がふってくる。猪苗代の雪は、まっ白で冷たいだけだ。負けるな！」

それが父の最期の言葉でした。それからひと月後。昭和20年3月10日未明。『B29、130機帝都来襲、深夜市街地を猛爆』（新聞の見出しより）

新聞の見出しに目を落とした私は、記事に吸い込まれていきました。しかし、死傷者の数は一行も記されていなかったのです。

父は二度と姿を現わしませんでした。その夜の空襲で生命を奪われてしまったのです。

「…憎い戦争が、私に与えた運命を、戦後自分なりに精いっぱい歩み続けてきたつもりでいます。これからも、子どもたちが戦争のために、私のような歩みを二度と繰り返すことのないように努力するつもりでいます。

何の罪もない、戦争孤児・戦災孤児の行く末には、心の痛む苦難の道が待ち受けていることを考えてあげてほしいのです。

戦場体験者は80歳代になりました。戦災体験者も70歳代になりました。私たちには、戦争で受けた打撃や、相手に与えた打撃を、次代の子どもたちに伝えていかなければならない義務があります。当時の、庶民の苦悩・叫びが、子どもたちの心の底に伝わり『真の平和への願い』が認識されたときにこそ、はじめて戦争の幕は閉じるのです」

と平和への祈りを込めて、話を結んだのでした。

私の戦争体験 国民学校1年生の頃

高橋 玲子

昭和16年12月8日、日本のハワイ真珠湾攻撃によって戦争が始まりました。日本では、この戦争のことを大東亜戦争と呼んでいましたが、後に太平洋戦争と呼ばれるようになりました。

明けて昭和17年4月、私は上海第七国民学校に入学しました。学校の周りは、日本人の文化住宅が何百軒もある新しい住宅地域で、「トン、トン、トンカラリと隣組」と歌われていたように、活発に活動する隣組があり、防空演習あり、灯火管制の見回りもあり、配給が始まって常会も度々行われていました。また、金属製品の供出は、飛行機を作る材料にするために、家でも鍋、釜やストーブも出しました。

「欲しがりません、勝つまでは」

「一億一心火の玉だ！」

「贅沢は敵だ！」

これらの標語はよく聞かされましたし、目にもよく見たもので、七夕の短冊にもそんな言葉や、偉い軍人の名を書いたものでした。

ルーズベルト、チャーチル、蒋介石の漫画の似顔絵もよく目にしたので、憎き敵国の最高指導者として子供たちはみんなその名前を知っていました。

歌う歌は、軍歌中心になり、読む本も兵隊さんのお話が多くなりました。男の子は兵隊さんになるのが当然で、女の子は看護婦さんになって兵隊さんの看病をするのが目標になっていました。

学校では、敵の飛行機の見分け方として、飛行機の形や、それぞれのマークをプリントしたものを渡され、教わったとおりに色を塗り、アメリカ海軍、陸軍、空軍のマークやロッキードとかボーイングとかを覚えしました。中でもみんなが恐れていたB29の名は、日本を破滅に追い込んだ立役者として忘れることはないでしょう。

その頃、日本人は三度の食事にはご飯を食べるのが普通でしたが、戦地で戦っている兵隊さんに米を送るため、「1日は1回の代用食にせよ」との命令があり、ご飯は昼の弁当と晩だけになり、家では、朝はホットケーキを焼いて、茹でたジャガイモを、会社に行く父も一緒に食べました。ご飯よりその方が好きな私はそれを喜びました。

街へ行くとデパートの前やバス停に、白い割烹着の上に「国防婦人会」のたすきを掛けた女性が千人針のさらしを持って立っています。印のついたところに赤い糸を通した針で玉を一つ作って返します。赤い玉のところを見ると、忠という字になっていたり、虎の絵になっていたりしました。千人の女性から、一玉ずつ作ってもらうのだそうで、隣組からもよく千人針が回って来ました。

私の母は、「私は、虎年だからいくつやってもいいの」

とってたくさんやっていました。出征兵士はそれぞれをお腹に巻いて戦地へ行くのだと聞きました。それをしていると敵の弾が当たらないのだと聞きました。

慰問袋も作りました。どんな兵隊さんに届けられるのか分かりませんが、隣組でも学校でも、手紙や絵を書いて入れて、缶に入ったドロップとか甘納豆の袋入りとか缶詰などを入れたり、携帯用の将棋セットなどを入れたりしました。私が手紙を書いていると、真似をして妹も手紙を書きました。それは、

「へいたいさんおげんきですか。

わたしはまいにちようちえんにいっています。あさってようちえんありません。ごきげんよう。ひろこ」

それを見て、笑ってしまいました。そのまま入れて出しました。驚いたことに弘子宛に兵隊さんからお返事が来ました。そのまた返事を弘子が出して、一、二度はお手紙をいただいたまま兵隊さんの消息は分からなくなりました。

やがて、防空頭巾を肩からかけて、通学するようになりました。大きな名札をつけて血液型の検査も学校でやり、何型であるかも書いていました。

毎朝運動場で朝礼があり国旗掲揚の後はラジオ体操をやり、その後は上半身裸になり乾布摩擦をしました。体を鍛えることが大事でした。

私は2年生になり、弘子は1年生になって戦争は益々激しくなりました。

私ども一家は揚子江を遡り、父の転任で九江へ行きました。空襲に次ぐ空襲の恐怖を味わい、学童疎開になり親と離れた厳しい生活と、怖い先生に睨まれて辛い小学時代の一時期を送りました。戦争さえなかったら。私ども一家だけではありません。戦争のためにみんな不幸になりました。広島・長崎の原爆投下とソ連の参戦によって日本はポツダム宣言を受諾、無条件降伏して戦争が終結したときは4年生になっていました。

9歳の夏

井口 タエ子

昭和20年7月4日、9歳の私は徳島大空襲を見た。1年前から、第二次世界大戦が激しくなり、本土への空襲が避けられない状態であった。

私が住んでいた四国の徳島県では、主に大阪方面から4,000人の集団疎開児童を受け入れ、あちこちのお寺に住むことになった。その頃、私の家には、大阪に住む父方の叔父2世帯が疎開して来た。その上、農機具の製造工場を開放し、身寄りのない5世帯の疎開者を受け入れていた。家の周囲は、子どもたちが大勢いて、まるで山の分校のように賑やかであった。



昭和20年になると戦火はいよいよ激しくなり、徳島県でも毎日空襲警報が発令されるようになった。小学校でも落ち着いて勉強が出来なくなり、空襲警報が発令されると、防空頭巾をつけて学校の裏山にある防空壕をめざして一目散に走るのが日課になった。

昭和20年7月3日の深夜から4日の早暁にかけて、米軍のB29約100機により徳島市街は空襲を受け、数千発の焼夷弾に見舞われた。この空襲により徳島駅周辺一帯は焼き尽くされ、ビルの外形だけが残った。被害者は70,000人余り、死者は1,000人を超えたと言われている。この夜、空襲警報により家族と一緒に防空壕へ行く途中、北の空が一面真っ赤に染まり、炎が燃え上がるその光景のあまりの凄さに、私は一瞬凍りついてしまった。その徳島市は私の町から、60キロ離れた眉山の麓一帯である。それがまるで私の町が焼けているかのように近く感じた。この衝撃は60年過ぎた現在も全身に深く刻み込まれて消えることがない。

それから55年経過した平成12年12月ハワイを訪れた時のこと、パールハーバーの見学者センターは、ホノルル市民が長蛇の列を作っていた。12月8日は、偶然「アリゾナ戦没追悼記念日」であった。1時間余り待ち、入館すると、アリゾナの歴史を綴ったドキュメンタリーフィルムが上映された。その内容たるや、いきなり真珠湾奇襲作戦を立案した山本五十六の姿と声に驚いた。山本大將が12月7日を選んだのは、日本海軍軍令部が、日曜日なら奇襲成功の確率が高いと予測し、ハワイを基地とするアメリカの艦船の殆どが、週末には真珠湾内に停泊する習慣を知っていたからだ。

日本軍から押収したフィルムによると攻撃開始1分後に、魚雷と爆弾を浴びたアリゾナは、早くも傾き始めた。1発の徴用爆弾がアリゾナの前部火薬庫に命中し、そこを貫通した結果、誘発されて大爆発になった。アリゾナは艦の半分を破壊されて艦橋にいた艦長と少將が戦死した。この大爆発により、アリゾナは被爆後、9分で沈没したといわれている。数百名の将兵は艦内に閉じ込め

られたままである。1, 177名の戦死者のうち、75名の遺体は回収され、1, 102名の遺体は、今も真珠湾の底に眠っている。この写真の撮影直前に第一次攻撃隊長が<奇襲計画成功>の暗号文「トラ・トラ・トラ」を打電したことなどの生々しく衝撃的な映像は重苦しく、約20分間は、とても長く感じた。この後、シャトルボートに乗り、真珠湾の「アリゾナ記念館」へ到着した。すでに追悼式典は終了し、星条旗が降ろされているところだった。



アリゾナ記念館は、全長55.2メートルで幅と高さともに変化をつけている。そして、アリゾナ船体の上に、まわりを囲み、浮き橋となつてまたがり、アリゾナ船体には接触していない。記念館の下、2.1メートルの海底に横たわるアリゾナの船体に日が射すと、付着した貝が金色に輝き、まるで宝石で飾られた石棺のように思えた。海面には、戦後半世紀余の現在なお油が漂う。これは亡き兵士達の怨念のように思われて胸がしめつけられた。同時にこの戦争で生命を落した多くの人々のことを思わずにはいられない。

ずらりと並んだ献花の中に日本からのアンスリュウムの花輪を見つけて思わず合掌した。思いがけず、真珠湾の追悼記念日に直面して第二次世界大戦中、ビルマで戦死した母方の叔父の幻が沖の白波に浮かび、なんとも感慨深い一時であった。

叔父は、幼い頃の私を海へ遊びに連れて行ってくれ、まだ泳げない私の手を引いて泳がせてくれたり、背負って泳いだりしてくれた。海に潜り、大きな蛤を採ってくれた。あの逞しかった叔父の姿が瞼に浮かぶ。5歳を頭に3人の娘を残して「必ず勝って帰る」と出陣した勇敢な叔父を見送った駐車場の光景が、ついこの間のように、まざまざと浮かんでくる。

この戦争で、どれ程多くの血が流されたことでしょうか。また、どれ程多くの尊い命が奪われたことでしょうか。戦争を体験した私たちは、戦争を知らない子どもや孫たちに、この戦争の悲惨なことをしっかり伝える責務があると考えます。そして、現代の平和な社会を守り続けたいと願っているのです。

私の戦争体験

中野 豊

今年も私にとって忘れられない終戦記念日がやってきます。

あれから60年、あつという間の出来事にも思え、戦友家族等が当時のまま脳裏に浮かんできます。今後絶対に行ってはならない戦争ですが、ともに戦い、命を落としていった戦友等を思い出しながら、「私の戦争体験」を記します。

「非常時とは？」

現在は意味が違って使われていると思いますが、当時（70数年前）は一時的に流行語になり使用した言葉です。

昔、青年教育機関の中に軍事教練の科目がありました。毎年秋になると、連隊区の偉い人が来て、その様子を見る「査閲」がありました。この年は、昔の村名で、西多摩、多西、東秋留の3ヶ村の若者が多西小学校校庭に集まり、そこで行われました。私等、高等科2年生（現・中学2年生）は上級生として、特別に査閲の見学が許されました。そして、最後の講評の時点で査閲官より質問がありました。

「非常時とは何ぞや！」

この問いに対し、数人の生徒が「世界平和や軍事経済外交等」と回答しましたが聞き入れられませんでした。査閲官の言うには「数年中に大戦争が起こるかもしれない・・・」ということが非常時ということでした。私自身、子ども心に世の中のことが何もわかりませんでした。これは大変なことなんだと思いました。数年経って、これが本当になり、世界の強国と戦闘を交えて日本は大敗してしまい、実に残念です。

「兵役へ」

小学校を卒業して数年は平和な日が続きましたが、昭和11年2月、東京で陸軍のクーデターが勃発し、翌年支那（中国）においても戦争が始まり社会情勢も厳しくなりました。

日本国建国2600年のお祝いの年（昭和15年）の6月、21歳を迎えた男子は徴兵検査を執行されました。数十名の内で甲・乙（一・二）・丙種等に分類され、甲・乙の一部の若者は現役兵、その他の者も召集令状により軍隊へと…。私も数少ない甲種合格に選ばれ、日本男子としてこの上もない名誉と思い、心身の鍛練をしながら、昭和16年1月、横須賀海兵団に入団しました。

「憧れの通信学校へ」

新兵としての基礎教育も2ヶ月で終了し、全国から選ばれた1,600名の同期生と共に3月に海軍通信学校に入校。そして、無線通信の訓練が始まりま

した。そこでは、健康は勿論のことでしたが、特に耳が良いということが必須の条件でした。連日にわたる、兵器や通信法規（モールス信号送受等）の勉強は22歳の私にとっては大変辛いものでした。

月日が流れ、時々、新聞により世界情勢が悪化したことを知りました。11月、学校の教科も終り、それぞれ各艦隊やら通信部隊へ転勤命令が下り、私も数名と共に東京海軍通信隊の配下へ…。

その間、険悪だった世界情勢も一層悪化し、この年の12月8日、日本が米・英国に対して宣戦布告した旨を知りました。事態の急変に我々も心をつにして戦時体勢に入ったことを思い出しました。

この時、世間の話では、我々海軍の山本長官は、戦争には断固反対であくまでも「平和外交」を進めたが、上層部の考えにやむを得ず納得したとのことでした。長官は、この時「最初のうちは何とか応戦できるが、長くは維持できないだろう」と言われたそうです。

予想通り最初の数日間は各地で戦果が上がったが、物量の少ない日本は後が続かず、翌年3月には、京浜地区の空襲に始まり、6月にはミッドウェー海戦で航空部隊の主力が殆ど全滅となり敗戦ムードとなりました。

「南方戦線へ」

昭和18年8月、第一連合通信隊司令部付でラバウル勤務を命じられ、数日後、横須賀より航空母艦「沖鷹（ちゅうよう）」にて目的地へと出港しました。最初は1隻で航行していましたが、数日後どこから来たのか大小二十数隻の艦艇が集まり、この大艦隊航行には驚きました。各海戦域でかなりの数の艦艇が沈没し、あまり船もないと思っていましたが、まだ、これだけの艦船があるんだと思うと一安心でした。この当時は、内南洋（うちなんよう）（現・サイパン島付近諸島）あたりまで、まだ制空権があったので無事にトラック諸島に着くことが出来ました。

「魚雷攻撃を受ける」

トラック諸島より輸送船「白山丸」に乗りかえ、護衛艦2隻と共にラバウルに向け出港しました。南方の海はとても綺麗で、かなりの水深まで見えたことを記憶しています。

我々も交替しながら外の見張りについた数日後の夕方近くのことでした。見張番の大声で魚雷の攻撃を知らされ、その数秒後には、水平線の彼方より数本の魚雷が我が船めがけて発射されたのが確認できました。一瞬の出来事で我々にはどうすることもできず、ただ、時間の過ぎることだけを願いました。

昔の話ではありませんが、まるで「弁慶の立往生」のように思えました。大勢の命を預かる船長はたいした方で、魚雷の攻撃を右に左にかわしながら無事ラバウルに入港させてくれました。

「我等の通信隊」

我等の通信隊は、ラバウルの西地区の高原地帯にあり、地名はヴナカナウといいました。そこは見渡す限り広い椰子林で覆われ、この手前の高台に陣取っていました。眼下には爆撃機の基地があり、日本軍の優勢時にはニューギニア・ソロモン方面への攻撃をよく目にし、その頃、戦果は上がりましたが、何時(いつ)しか我が方は不利になり、地上の建物は殆ど爆破され、地下壕での任務となりました。軍は、物資の補充も無く、ただこの場所を守っていました。

敵方は、日増しに兵力を増強し、さらに爆撃機で焼夷弾の攻撃を仕掛けました。一時期は数十機あった一式陸上攻撃機も殆ど全滅してしまい、我等の間も数名が犠牲になってしまいました。

「終戦」

昭和19年にサイパンが陥落してからは、米軍の勢力は増大するばかりとなりました。最後まで防戦した沖縄決戦でも物資の差で陥落し、昭和20年8月には、本土の広島・長崎地区に原子爆弾が投下され大被害を受け、とうとう15日に、日本が敗戦したことを認め、終戦となりました。

「復員」

昭和20年8月の終戦を機に、外地からの復員も始まりました。我等、南方圏にいた者は、昭和21年春から始まり、私の隊では、5月中旬に名古屋に上陸し、復員手続きを済ませ、それぞれ家族の待つ懐かしい郷里へ戻ることが出来て感無量でした。

「追記」

いろいろ取り留めなく書かせていただきましたが、これは私の頭にあるほんの一部の内容です。時代も変わり、戦争の意味を知らない世代が多くなった現在、昭和20年8月15日の終戦記念日にあたり、親から子、子から孫へと「二度と行ってはならない戦争の意味」を伝えていっていただきたいと思います。

また、昨今、学校によって日章旗・国歌のことでいろいろ問題を抱えている様子です。ご承知の方もいると思いますが、横田基地では毎日、日・米両国の旗を上げ下げし、それぞれの国歌を演奏しています。これは、日本の国を思っでの礼儀だと私は考えております。基地の近くでの演奏を聞くたび、姿勢を正し、素直な気持ちで時を待ちます。

秋津の平和観音

西村 信友

電車は秋津駅のホームから200メートルばかり手前で止まった。これから先は不通である。昨夜の爆撃で秋津駅構内が破壊されてしまったのである。当然ホームのないところで電車から降りることになる。はしごのような階段が乗車口に掛けられて、そこから降りる。東京大空襲で家を失い、転校した学校の勤労動員先での初めての夜勤帰りである。線路沿いに歩きながら前方を見ると、アメのように曲がったレールが宙に浮いていて、その向こう側には大きな穴があいている。爆撃の跡である。駅構内に入ると、更に数か所の穴と、破壊されたレールが見えてきた。復旧には大分時間がかかりそうだ。

武蔵野電車（現西武池袋線）は保谷を出ると、単線でほとんど雑木林と畑の中を走っている。昨夜の夜襲の目標は軍事基地のある所沢と思われるから、秋津はそのとばっちりであろう。

駅構内を抜けると、近くに昨夜のB29が撃墜されているという話を聞いた。今降りた乗客たちも先を急ぐよりも、その方に関心に移ったようだった。ぞろぞろという感じで人の列ができ、墜落地点を目指した。私の家を焼き、叔父一家を全滅させ、近所の親しかった人々を殺した憎っくきB29の末路を私も是非、見たかった。

それまでに私は撃墜されるB29をいくつか見てきたが、直接墜落現場に行けるのは、初めてである。心が踊った。

初めて墜落されるのを見たのは、東京空襲が本格的になってきた頃であった。多くの都心の人たちが目にしたのである。そのB29は編隊から離脱、高度も低く、エンジンから白煙を吐きながら、一刻も早くサイパンの基地に辿り着きたいという気持ちを表すかのように、北から南へまっすぐ都心上空を通過していった。このまま逃げて行ってしまうのか。かたずを呑んで目でB29を追った。やがて、東京湾上空にさしかかった時、突然、失速。きりもみ状態になった。といっても何しろ大きな機体なのでゆっくりとしたきりもみである。時折、機首を上げようとするらしい様子があるが、そのまま落ちていく。そしてついに海上に墜落。爆発したのか、数百メートルの黒煙が立ち上がった。私も一緒に働く工場の人々も飛び上がって喜んだ。まさに狂喜乱舞であった。東京大空襲の2ヶ月前のことである。

今朝、間もなく目前にB29が見られる。ことによったら機体に触れられるかも。「期待半分、仮にも敵機だから怖さ半分、ワクワクしながら、秋津駅から5分ほど歩いた頃、ほこりっぽい道にこぶし大のうす黒い塊が辺りに散乱しているのに気がついた。しゃがんで目を凝らして見た。褐色の毛が生えている塊だ。やっと気がついた。肉片だ。憎い米兵の肉片だ。西洋人は毛深いと聞いているから毛のついた肉片だ。そう判ると私は、「コン畜生ッ！」家を焼かれてま

だひと月経っていない、怒りにまかせて思い切り踏んづけた。ぐにゃっ！とした感触が、当時履いていた地下足袋から直接足に伝わってきた。気持ち悪かった。踏みつけるのはやめにしておあたりの肉片を蹴飛ばすことにした。そして、いくつか蹴飛ばした時、ハッ！として足をすくめた。足のつま先だけの、しかも5本の指がそろっている肉片である。これはさすがに蹴飛ばせなかった。

墜落地点は畑の中。すり鉢形の大穴があいていた。付近の農家も跡形もなく吹き飛んで、土台だけを残していた。機体は墜落と同時に搭載の爆弾と共に爆発したのだろう。周辺には、機体の金属片と多量の綿が散らばっていた。何で綿が？不思議だった。(高高度爆撃機だから断熱材と思われる。)

秋津の人たちは、私が蹴飛ばしながら歩いた遺体の断片を遺留品とともにその日のうちに丹念に収集して、付近の墓地に埋葬したことを戦後、耳にした。戦争の犠牲者として、敵も味方もなく葬ったのだろう。中学生だった私には到底考えの及ばない、同じ人間として、怨讐を超越した大人の業(わざ)だと思った。

その後、遺族もこの地を訪れ、日本の手厚い慰霊に感謝し、地元の人たちと交流が今も続いているという。

昭和35年、墜落地点の地主さんは、その場所に米兵の慰霊と平和を願って平和観音像を建立、ジョンソン基地(現自衛隊入間基地)の司令官も列席して開眼法要を営んだという。ここにも、人間同士、大人の業がある。

数年前、私はこの地を再び訪れた。平和観音は、夕暮れの買い物で賑うスーパーの前に時の流れに取り残されたように立っていた。あの日のあたりの農村風景は街の中に埋没していた。

昭和39年、時の日本政府、佐藤栄作首相は、日本の都市への無差別爆撃、原爆投下の司令官だったルメイ将軍に、航空自衛隊の育成に多大な貢献をしたという理由で、勲一等旭日大綬章を贈った。こちらも大人の業か？こちらには私は納得していない。

* 平和観音建立の記述は多摩中央信用金庫「多摩のあゆみ」35号、小池紀枝さんの文章「秋津の空襲」を参考にした。

父の日記から知る戦争

大木 紀子

私の父は昭和20年6月10日、6人の子供を残して42歳で病死しました。9ヶ月の闘病生活でしたが、その初期の半年間、病床随記と名づけて4冊の日記を残しています。

私自身は、終戦の年が5歳でしたので戦争の記憶はほとんどありませんが、父の日記から当時の世相や戦況を知ることができます。それらのことを、私を含めて戦争を知らない世代が知っておかなければならないと思い、寄稿しました。

日付順に抜粋してみました。

昭和19年9月12日

新聞はまだ来ず。

「カラコロとよき音をさせて、配給の野菜を買いに出かけゆく妻。」

「配給と言えば、梨なのか、りんごなのか

真顔になりて子等はきくなり。」

9月13日

今日もまだ新聞は来ぬ。

子どもに配給となったカリントウ菓子、うまい。これで当分、菓子の在所を巡って子どもの目が光るであろう。紀子なんて羊羹もカステラも餅菓子もチョコレートも何も知らぬ。マサ(私の母)は卵を見つけるのだとて出かける。今夜は何もないのだと言う。何ひとつ買うにもコソコソと闇をくぐって買わねばならぬ情けなさよ。この辺り(埼玉県行田市)では、ナス1個、キュウリ1個も八百屋にない。サツマが食べたくてもない。事変以来、卵の配給はただの1個でも受けた覚えはない。

9月16日

待てど、待てど、首を伸ばして待てど、新聞は来ず。淋しい夕。

9月29日

1日おきの郵便来る。とうとう郵便も戦時型になった。

10月2日

ゴボウを買う。いい値段だ。金の値打ちは下がるばかりだ。その中で「食う物」を生産する農家が鼻息の荒いこと。また、やむを得ぬ。

10月21日

先日の台湾の戦いで320数機の未帰還あり。15日の比島沖で少将、有馬正文指揮官の体当たり戦死発表あり。ああ申し訳なし。早く丈夫になってお国に尽くそう。

10月26日

飛行機が朝から乱舞している。この音は国を守る音。これが敵機だったらどうしよう。昼間はサツマ3本で代用食。

10月29日

Sさんから柿を5つ貰う。さあ大変。忽ち子供たちの察知するところとなり、紀子しきりに偵察に来て、その眼の動き尋常ならず。ついに分けてやることになった。達哉(兄)、和子、栄子(共に姉)は明日の行事(遠足のこと)に持ってゆくのだと言う。親の口へは影も入らず。

11月20日

S君、一人息子の戦病死のことで来る。実に気の毒だ。あのお袋さんを思うと何とも言えぬ。最近、これで4人の戦死者が出た。戦地の容易ならざるを思う。

11月23日

酒7合配給。内2合警防団へ寄付。2合はひどい。1合でよい筈。

11月24日

おばあちゃん、豆腐を持って来てくれる。豆腐も珍品中の珍品となる。

11月26日

今日は10月分の味噌、醤油の配給。久美子取りに行く。午後1時から田中絹代が「山茶花の咲くころ」という放送をしている間に警戒警報あり。敵機伊豆半島北上中、敵機帝都上空にあり、敵機眼下京浜上空にあるも空襲警報発令までは高射砲を発射せず。僅か20分間に4回も東部軍情報が出るのだ。瞬時も油断はできない。また、生死の問題も一寸先は計り知れない。1発の爆弾が落ちれば、瞬時に10人位の生命を奪うことはわけない。久美子(長姉)、達哉、2人が菜を貰ってきた。何しろ野菜物は一切売る店、売りに来る人がない。配給もない。何とか自分で見つけねばならない。さればとて、9人の人間を賄うべく作ることもできない。非農家の苦しみは容易でない。

11月27日

警戒空襲警報。為に葬式は2時間遅れた。(父は寺の住職)1日気をもんで、身体非常に大儀である。

11月28日

岸屋さん来り。婿さんの戦死につき墓地を譲ってくれと来る。これで4人。何とか解決せにゃなるまい。

昭和20年1月1日

朝5時、警戒のサイレンが鳴った。元旦でも敵機は来た。もっとも昨夜は2回も敵機来襲。昔はラジオが10時半まで正月のお笑いで賑わい、除夜の鐘を聞いたのに、聞くものは敵機の爆音である。

1月14日

仏具の代替交換だ。これでいよいよ真鍮仏具はなくなった。あつらえておいた鯉節来る。1本30円。ただ啞然、恐ろし。昔なら7、80銭の代物なり。インフレどこまで行くのか。

2月11日

昨夜、野村(現・行田市)に爆弾落ち。2家族8人全滅の由、憎きはメリケンなり。今日より面会謝絶をする。

現在のこの平和な生活を将来も続けていくために、今、私達がなすべきことは何なのか……。気が付いたら戦争になっていたということが起こってしまいそうな不安な思いにかられるこの頃です。

祖父の戦争体験

小田切 千恵

これは、私が大学生の時に、私の一番身近な戦争体験者である母方の祖父に聞いた話です。

昭和19年6月15日、初めて東部第三部隊に入隊した祖父は、その後、間もなく3ヶ月間の教育召集を受けることになりました。教育召集の内容として、最初の1ヶ月は、大砲の扱い方などを学ぶもので、誰もが大砲を打てるように訓練をしました。その他、雑用として、その大砲を引いてくれる力が馬であったため、それらの馬の世話をすることも大切な仕事でした。残りの2ヶ月間は、千葉県松戸市へ行きました。そこでの仕事内容は、飛行機を敵から隠すための作業でした。このような仕事を3ヶ月間こなし、8月31日に原隊へと戻りました。

しかし、教育召集は解除されましたが、同時に臨時召集へと編入しなければなりません。7月18日には、祖父の隊の仲間の3分の1が初めて外地へと出発したそうです。その後、9月10日にも3分の1の仲間が出発しました。この時の仲間は外地へ行く途中の海で亡くなってしまったそうです。

祖父は、最後の3分の1に残ったために外地へ行くことはなく、東部第20部隊に入隊し、宮城（今の皇居）を守る隊へと転属しました。機関砲大隊の第6中隊にて20ミリ機関砲の教育を受けながら、終戦になるまでに至りました。

祖父の戦時中の兵舎は学習院の屋上で、その時の仕事は雑役、使役などがありました。雑役としては、迎賓館のカーテンはずし等があつて、その時ばかりは、「かつらぎ（桂着）」という布（白く厚い布地でさらしより厚地）で作った新しい服を着て、カーテンはずしの仕事に就いたそうです。そのカーテンは、明治20年頃から掛けられていたものであったために、埃で真っ黒でしたが、貴重なものなので爆撃で燃えてはいけなないと、はずしておいたようです。使役としては、戦場ヶ原の端で皇居においての陣地作り、防空壕作りを行いました。

在隊中の食事は自給自足で、農地は焼け跡を掘り起こして、キュウリ、ナス、トマトなどの様々な野菜を作っていました。主食は白米、おし麦、コーリャンを全て同じ比率で合わせ炊いたものでした。食事作りは当番制だったそうです。

空襲のときは、B29が通り過ぎ、焼夷弾を落としていったので、外に出てみると、様々な人が大火傷を負って苦しんでいたそうです。ある時、着物を着た女の人が全身火傷をして助けを求め、水を求めて来たそうです。その女性は全身が大火傷をしていたのに、帯を巻いていた所だけが火傷をしていませんでした。帯は他の部分より厚く、布によって保護されていたので、熱い炎から守られたのです。そのときに苦しんでいる女性を周りにいた人たちは見殺しにできずに、少しでも苦しみを和らげようと考え、火傷には酸の水が良いと近くにいた人たちが集まり、バケツに小便を貯め、タオルで湿して応急処置をし

てあげました。しかし、火傷は全身でしたので、皆の応急処置の甲斐もなく、残念ながら亡くなってしまいました。

このような残酷な場面を何度も見ながら終戦を迎えました。そして、祖父は昭和20年9月7日、家族の下へ復員することができました。家族全員の無事を確認し、本当の終戦を迎え安心したと言います。祖父はきっと1日たりとも家族の心配をしない日はなかったのではないかと私は思います。

終戦後、60年も経ちますが、昭和39年頃から、靖国神社で毎年、戦友会が開かれています。しかし、戦争で外地へ行くことなく無事に生きられた戦友たちも、最近では病気などで亡くなってしまいう人も多く、参加する人々も年々減っているようです。

これらの戦争体験を祖父から初めて聞いたことを大変に貴重なことだと思います。学校で課題として課せられることがなければ聞くことはできなかったと思います。今までも本などで調べ、戦争のことを知る機会はありましたが、身近な人に聞くというのは、初めてでした。協力してくれた祖父にも感謝をしています。戦争と言う悲惨な体験を通して、祖父も平和の尊さを感じていたと思います。沢山の人の命の犠牲があったことを思うと、改めて平和の大切さを思わずにはられません。その祖父も2年前、天寿を全うし、88歳でこの世を去りました。

戦争の記憶をたどって - 良い子だったわたし -

高松 久美子

昭和12年、品川区で4人兄弟の次女として生まれた。父は紳士服専門の職人で3人の職人を使い、都電の通る広い表通りに店を構えていた。母は、おかみさんとして、又母親として、口うるさい父のもとで、職人の食事の世話や私たち4人の子育てに追われていた。ごく当たり前の普通の生活がそこにはあった。それが戦争によって大きく変わってしまった。

父がいつごろ召集されたかははっきりしないが、軍服を着た父が私を抱き家族や近所の人たちと記念写真に収まっているのを見たことがある。食べる物が乏しい中、マレー半島で通信兵としてやっていたと後日聞いた。

戦争が激しくなる中で、私たち一家は、品川の上大崎の家から、狛江の叔母の家へ疎開した。その頃は、まだ田舎だった狛江は緑の樹々が繁り、多摩川がゆったりと流れる静かなところだった。同じ年頃の従兄弟が2人いるその家は余り広くなく、今思えば母も随分、気をつけていたと思う。

ある日、真夜中に家の近くに焼夷弾が落ちた。近くに軍需工場があり米軍がそこを狙ったのだ。サイレンが鳴り騒然とした中を真っ赤に燃え火の粉が散る空を後にして、皆で走った。真暗闇を多摩川の土手近くの松林迄行った。母は2歳の弟を背負い、4歳の弟と6歳の私の手をつないで無言だった。その一夜が明けて、母は私を2つ年上の姉が集団疎開している所(青梅市)に預けることに決めたようだ。まだ学童疎開の対象年齢に達していない1年生だった。何も分からない小さな1年生だった。

同じ頃、東京品川周辺にも空襲があって、私たちの家も焼け出された。疎開する時には女世帯だったので身の回りのものしか持って行けなかった。家そのものだけでなく、それまでの我家の総てを焼かれてしまったのだった。中でも大切な家族のアルバムを失ったことは、幼い私の戦争へのやりきれない憎しみにつながっている。幼い頃の自分に会いたい、プツンとその頃の記憶に穴があいたままだ。平和だった家族6人。普通の生活をしていたあの頃のことをもう父も母も他界してしまった今、語り合うこともできない。

我家には今、アルバムがない。自分が育った中でアルバムというものを見たことがないからなのだろうか……。

60余年前の疎開先でのことで今も心の奥に残っていることを散発的ではあるが、書いておきたい。

・ 柚木公会堂でのこと

青梅市柚木村(現 青梅線二俣尾駅付近)に、品川区の第三日野国民学校の子供たちが集団疎開をしていた。その頃、東京の山の手から見ればかなり遠い地域で安全な田舎だったのだろう。

公会堂は畳敷きの大広間だった。2人の寮母さんのことは、おばさん、おねえさんと呼んでいた。笑うとエクボの出るおねえさんは目が細く、ぼっちゃりとした優しい人だった。毎日の主食はサツマイモやカボチャ、ジャガイモ、とうもろこしだった。おかずは殆どなく、時にワサビ漬けが付くことがあった。その頃、村長さんだったいわささんという人が差し入れてくれていたらしい。子供たちは出された物を食べるだけだった。幼い子どもがああの辛いワサビ漬けをどうして食べられるのかと思う。また、絞りたての濃い牛乳が出ることもあった。それはその頃、柚木の近くに住んでいた吉川英治さんからの差し入れだったと聞いた。食糧難の時代、地域の人たちが疎開児を助けてくれていたのだと大人になった今は感謝している。

・怖かった夜中のお便所

宿舎の公会堂のお便所は別棟にあった。夜中におしっこに起きると、闇の中で多摩川の流れが地の底からわき上がるようにザーザーと大きく聞こえてきた。渡り廊下のスノコを歩くとキシキシと音がした。疎開したばかりの私はその静けさの中で泣くこともできず、おねえさんを起こすことも知らず、姉にも声もかけられず、月明かりの中で怖さにじいっと耐えていた。

後に公会堂の周辺に行った折にも、あの怖かった川の音がはっきりと聞こえてきた。

・面会、そして、別れ

母は時々、弟を連れて面会に来てくれた。母に会えるという喜びよりも、食べる物の差し入れが楽しみだった。誰もが珍しい食べ物に飢えていた。面会に来られない親もいたので、皆の前で風呂敷包みを広げることはできない。皆がそうしていたように、帰る母を送りながら近くの「奥多摩橋」まで行った。その橋の袂に腰掛けて包みの中のおまんじゅうやおにぎりを夢中でほおばった。つかの間の満ち足りたひとときだった。

母が「先生の言いつけを守るのよ。元気でね・・・」と小さな声で言って私たちの前からゆっくり離れていく。「ハイッ、また来てね」と、その時は元気でさよならをする。遠ざかっていく母を見送っているうちに涙が込み上げてくる。「お母さーん、お母さーん、今度いつ来てくれる？」と姉と2人で叫んだ。母は、ちょっと後を振り向いて、さようならと手を上げて弟2人を連れて遠ざかって行った。うなずくだけだった。白い橋の袂は、いつも良い子でいなければならない疎開児にとって、幼い普通の子どもになってしまう悲しい別れの場所でもあった。

・飛行機が落ちたときのこと

終戦の日も近いある時、公会堂の裏の山（愛后山）に米軍の小型飛行機が墜落した。油まみれで黒く焼け焦げたような飛行服を着た米兵が両手を挙げて山

の中から出て来た。油臭かったが怪我はしていないようだった。初めて見るアメリカの兵隊。今思えば、捕虜として降伏してきたのだ。周辺の人たち皆は、訳もわからず米兵が何やら言っているのを怖がり、ただ遠まきにして見ていた。その場の異様な雰囲気は今も頭の中に残っている。

この世に「生」を受けた誰もが幸せになれる未来の可能性を授かる。

戦争という大人達の無意味な争いによって、幼い子供の未来を奪うことがあってはならない。「命」は1人ひとりに与えられた、たったひとつのかけがえのないものなのだから…。

奥多摩の山並みも多摩川の流れも、あの頃のままだ。

私は68歳。平和な社会に生きていられる今、幼い子どもたちに子どもらしくくふつうの生活ができるような、幸せな未来と自由がありますようにと祈らずにはいられない。

戦争と共に育った20年

野崎 衷

私の生まれたのは、1926年、大正15年2月です。小学校に入学したのは、昭和7年、「ハナ・ハト・マメ・マス」の音読から始まりました。それも翌8年には教育統制が布かれ、「ススメ・ススメ・ヘイタイススメ」に改定され、同じ歳でも遅生まれの子は新しい教科書となり、兄姉のお下がりで済ましていた私たちには、羨ましい限りでした。

昭和7年は、中国東北地方を中国から切りはなして「満州国」をつくりあげ、日本人の利権と軍の駐留を確保したことで、東京の我が家は花電車が通るは、縁日が立つやら、万歳、万歳のお祭り騒ぎの年でした。

2・26事件の時は10歳。その日、東京は大雪で戒厳令が布かれ、学校も休みになり、市電もバスも走らないのをよいことに、手製のスキーで友達とはしゃぎ廻っていました。この2・26事件を足場に軍部の政治的発言権が強まり、後に「大政翼賛会」という日本独自のファシズム体制が完成されました。

日中戦争が始まったのは、小学6年生の時です。南に向けて飛び立つ十数機の爆撃機で空が真っ暗になり、子ども心に不安を感じたのを覚えています。すでに日本は「満州事変」を機に国際連盟を脱退しており、米、英との調和の道を自ら断ち切ってしまいました。

友邦国を無くした日本は、中部ヨーロッパで強力な軍事力により隣国を併合していたドイツ、アフリカに進駐してエチオピアを手に入れていたイタリアと三国同盟を結び、第二次世界大戦突入の土壌が醸されていました。日本国民の中には、軍需産業の新興で一時的に景気がよくなり、戦争も悪くないなという機運も生まれていました。他方、軍に協力しない国民には厳しい弾圧が加えられました。

日中戦争で兄が出征し、空いた部屋に一時、朝鮮人が下宿していました。美術学校に通っていて、絵の手ほどきをしてくれました。引っ越した後、警察に調べられ恐ろしい思いをしました。

昨年、韓国を訪れ、朝鮮2000年の歴史と文化を駈足で見て周り、日本・朝鮮・中国の東アジアの諸民族は、体制の違いを越えて兄弟国という強い同族意識を新たにしました。

昭和13年中学入学、18年卒業。履歴書ならたった一行ですが、その中に若い日の思い出の数々があります。親友と呼ぶことのできる友人、よき師を得たのもこの時期です。昭和16年、太平洋戦争が始まって間もなく、先生は応召され帰っては来ませんでした。その頃になると、「校門は営門に通ず」と学徒出陣が始まり、私は徴兵延期のある理科系に進学しましたが、すでに学究の場ではなくなっていました。戦争の重みは「汝等青少年学徒の双肩」にかかり、「学徒動員」の毎日で、その上、東京大空襲で焼け残った我家には下宿を焼け

出された学友が身を寄せ、早朝5時から1時間、陸軍戸山学校で実弾射撃の訓練と寝る間もないほどの日課でした。

昭和19年になると、理科系にも「学徒出陣」が始まり、私は僅か4ヶ月ですが兵営で過ごしました。健 部隊靖国隊に編成され「本土決戦・一億玉砕の盾となれ」が任務でした。

昭和20年8月15日、晴天。その日から艦載機の爆撃も艦砲射撃もなくなりました。人生20年と定めていた命もながらえ、人も殺さずに済みました。復員にあたって大隊長より「天皇陛下の命により軍務は解くが、皇軍としての使命が終わったわけではない。いつ再び召集がかかっても、軍務に戻れるよう備えていて欲しい」と訓示されました。

私が真に兵役を解かれたのは、1947年、昭和21年11月3日、日本国憲法公布による憲法9条でした。

戦後60年、日本にも幾度か戦争の危機がありましたが、こうして平和な日本が続いたのは、憲法9条があったからです。戦争は国の未来、個人の一生を変えてしまいます。平成11年5月、百カ国以上、一万人が参加した「ハーグ平和アピール世界市民会議」では、「日本の憲法9条を見習い、各国議会は自国に戦争をさせないための決議をすべきだ」と位置づけました。

憲法9条は、全人類普遍の理念として世界に広がりを見せているのです。

ふるさと銚子

樋口 和子

「ソカイってなあに？」と、若い人から聞かれることがあります。一瞬ドキッとしますが、今や死語となりつつある言葉なのかもしれません。私は戦争の「語り部」になったような気持ちで疎開について説明してしまいます。

十年前、羽村市で出版した「語り継ぐ戦争体験」に投稿し、私の戦争体験は全部書き終わったつもりでしたが、今度もまたペンを取ってしまいました。このことは、私が生きている限り風化することのない思い出なのですね。

私は小学3年生の時に母の実家のある茨城県に縁故疎開をしました。その家には、戦火を逃れて東京からきた家族と、満州から引き揚げて来た家族と、三家族が身を寄せていました。夫は、宮城県の作並に学童疎開だったそうです。

その頃、「欲しがりません、勝つまでは」という言葉が、子供心にも染み付いていた時代でした。言葉と言え、軍艦マーチで始まる大本営発表の敵機撃墜の勇ましいラジオ放送。「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び……」の戦争の終わりを告げる聞き取りにくい玉音放送。私には、忘れられないで耳の底に残っています。

孫が小学生の時のことです。

音楽の時間に「ふるさと」の歌を習いました。先生は保護者に「ふるさとについて何か書いてください」と呼びかけました。

「私は千葉の銚子で生まれました。3年生の時、戦火に追われてふるさと銚子を後に、茨城県銚田町に疎開して、そのまま銚子に帰ることができないままです。私にはふるさとが2ヶ所あります。でも、強いていえば、ふるさとは私の心の中にあります」と、祖母よりと、

正確ではありませんがそんなことを書きました。

数年前に姉妹で銚子の地を訪れました。昔のままの漁港を歩き、住んでいた周辺の道を歩きました。

「ふるさと銚子」

活気のある / 漁港のまちに / 戻ってきたつもりだが、 /
岸壁につながれた / 漁船の群れは静か /
魚の姿も / 臭いもなく /

昼の漁港は / 漁船も / かもめさえも / 昼寝の最中なのだろうか /
路地からは / 「大漁節」も聞こえてこない

このまちに住んでいた頃 /
鮮やかな大漁旗が / 港に轟（ひし）めき合い /
迎えに来た女衆（おんなし）たちは /
バケツを手に / 魚のおこぼれを / 貰っていた

船のエンジンの音 / 漁師たちの声 / 魚たちのはねまわる音 /
魚市場の高い天井に / 響きわたっていた。 /
今は / そんな音が聞こえない

我家の跡には新しい家 /
声を掛けると /
昔を知らない人が / ニッコリと笑って顔を出した

まちは /
戦争のあった記憶すら忘れたのか

もしも戦争がなかったら、私は何処で何をしていたのでしょうか。日本の国はどうなっていたのでしょうか。想像の世界は、現実よりももっと素晴らしいものに見えてきます。でも、確かに、戦争があったのです。私は子どものときに戦争体験をしたのです。

この事実を若い人たちに語り継ぎ、戦争の愚かさを後世に伝えられたらと思い、書き記しました。

平和への思い ～ 9条をいかせ～

佐久 文雄

日米戦争勃発の真珠湾への出撃は今になってテロだとか、早とちりだったなどと言われ「あれ？」と思ったり、考えさせられる。

その当時の米軍の言い訳は、日本がインドシナ南部から撤退するなら石油供給は再開する、さらに中国には干渉しない。という戦争回避と受け取れる姿勢であった。

ところが、米軍へ何か救いを求む感じのやり方で中国は接近してゆく。さらに英国に対しても中国は歩み寄る形で外交の多面化に出た。

日本と米国の妥協の方向を危険に感じた中国が、こりゃ一大事と思ったかもしれないが、日米戦の基因とは思いたくはない。

戦争とは言ってみれば、軽率な動機から火がついてゆく。真珠湾へ飛ぶ前に百を数えて待つ戦略がとしみじみ思う。

今、北朝鮮の六ヶ国協議がなされている。平成17年8月8日現在、交渉はもつれて協議は中止との方向らしい。ただし、2週間の時をおいて再開とのこと、よいことではないか。

議長国の中国は米軍とは14回、北朝鮮と11回も折衝したことが新聞に出ていた。根気よく話し合い、納得行くまで時間をかけることは、その後の平和を先取りすることにつながると思う。

これからの戦争は、科学物資からなる弾の空爆をやってさらに、核ミサイルでのやり合いでとなる。戦争になる前に十分な国際外交へ政治情熱を燃やす必要がある。国際間の交渉外交はやはり言語力、思考力から組み立てられる相手国との討論の力であると思う。交渉の背景は軍事力ではない。これからは特に、この認識が必要といえよう。軍事力は機密や軍規が一大要素で、生命を軽んじて成立するやむを得ない本質がある。

武器を持たぬ、殺し合う戦争を根絶する。これを全力投球で実現に向けて突っ走るのが政治ではないか。日本が存立して繁栄してゆくには安全な国、つまり、これを保障するには外交と防衛である。日本には外交があっても形だけで、二言目には防衛である。

武器のないことで平和をつくる。相手を殺し、自分もやられる、命を捨てて頑張る撃ち合いが、なんでも人のため、国のためか。この辺の原点を突き詰めて、新平和日本をつくり、樹立して行くのが政治で、大変でも世のため、日本のための仕事であるといつも思う。

口利き政治ではない。政治がやる気なら、現実の平和憲法で日本は国際社会に通用する。原爆投下され、今なお266,000人の被爆者が苦渋の日々にある。この原爆症カードすら生かせず平和をとことん強調できぬ日本政治が悲しい。

北朝鮮からノドンが十分後に東京、大阪に落下。だから、備えが必要と…。しかし、政治が北朝鮮へ行ったその頻度は大変に低いように思える。

政治の言語力と思考と討論力を磨いてもっと外交に力をいれてゆこうではないか。朝鮮半島や中国の感情を逆なですることを続けていて（靖国詣で）、良い外交が構築できる筈がない。さらにきなくさい法律が矢継ぎ早に成立。新ガイドラインその他である。

憲法改正の必要を一般世論調査でも、国会議員向けアンケートでも、改正は高い推移にある。ただし、どこをどう改めるかの具体的な方向は定かではなく煮詰まっではない。

先日、与党の新憲法起草委員会の出したそれも、きなくさい法律が幾つかでた割りには、改憲の真剣さは薄いように感じた。しかし、自衛軍とする呼び方や海外で軍事行動ができるとしているのは気がかりだ。

いつも思う。現憲法は敗戦で押しつけられたもの、理想が過ぎて現実にあわぬとよく聞く一言である。現実的でないなら理想に近づける仕事が政治であろう。利する口利きが楽なのか、これでは情けない。

日米戦争で若い命が「特攻」と呼ぶ火の玉作戦で、これも踊らされた愛国心であったかと思うが、純情無垢（じゅんじょうむく）な若人が多く殉じた。この尊い犠牲に感謝し、敬意をもって靖国参拝するのに否定はしない。尊い犠牲の人間魚雷で散った命を最大にいかし、尊く思うなら、憲法9条は絶対に今後も存立させて世界に平和を広めてゆくべきだ。

真珠湾への攻撃もその後のポツダム宣言も無視した日本の政治行政の誤り、国民の不安不幸はここからスタートしたのだった。戦争のない日本として9条は消さずに灯としてゆくことを痛感する。

平和啓発講演会実施概要

- 【日 時】 平成17年8月21日(日)
午後2時50分～午後4時50分
- 【会 場】 羽村市産業福祉センター wing I ホール
- 【演 題】 「東京大空襲を語る ～平和へのメッセージ～」
- 【講 師】 西村 信友 氏
- 【略 歴】 1930年(昭和5年)東京都深川門前仲町生まれ。
東京外国語大学卒業。立川市、瑞穂町の公立中学校教諭
を経て、定時制高校非常勤講師、東海大学菅生高等学校
非常勤講師として勤務。市内在住。
現在、戦争の悲惨さを語り継ぐため、自治体等における
平和啓発講演会講師として活躍中。

平和啓発講演会記録

はじめに

西村です。暑い中、参加していただきありがとうございます。戦争の経験談を全部お話すると、時間が足りないので、私の東京大空襲の時の体験を中心にお話します。よろしくお願いします。

東京の地下鉄に東西線というのがあります。中野から西船橋までいく鉄道ですが、その建設中（戦後22年目）に、門前仲町（私の出身地）の地下を掘っているときに戦争中の防空壕にぶつかりました。戦争が終わって22年も経っているのにもかかわらず、中から遺体が3体出てきました。それは、1945年3月10日の東京大空襲の時のものです。3体の遺体は、持ち物から身元が判り、戦後22年目にして、家族の元に帰りました。深川の辺りには、まだ埋まっている人がいるだろうと思います。なぜなら、本所、深川というところは、一番被害の大きい土地ですから…。

東京大空襲まで

日米戦争が始まって、半年間は日本軍が勝っていました。半年後のミッドウェイ海戦を機に負け始めました。そして、敗戦となります。

米軍は日本と開戦する以前から、長距離爆撃用の飛行機の開発に着手していた模様です。その飛行機がB29です。一説によると、B29の開発には、原爆よりも費用と時間がかかったともいわれています。現在のジャンボ機など大型機の基本設計はB29だそうですから、高性能だったことが分かると思います。

1944年6月15日、B29による爆撃が北九州から始まりました。この時のB29は中国から飛来しています。B29の基地があった中国の奥地、成都は燃料の補給がヒマラヤ越えで行われていました。そのため、成都からの爆撃は困難なものであったようです。



そこで、日本の近くから爆撃に出発できるように、サイパン、テニアン、グアム島を占領し、B29の基地を作りました。サイパン島には沖縄からの移民がいたため、一般住民も相当の被害を受けました。テニアンに住民は多くなかったでしょうが、後にここから原爆を積んだ飛行機が出撃することになりました。そして、米軍はこの3つの島に5つのB29の基地を作ります。これらの島は現在リゾート地ですが、私はそうは思いません。とても、遊びに行こうとは思いません。

サイパンが占領され、日本への爆撃が近いことが分かると、学童疎開が始まりました。羽村や瑞穂には品川からの学童が集団疎開してきたと思います。3年生より上は、強制疎開でした。田舎のある人は田舎に、ない人は学校で集団

疎開していきました。そして、都心から、小学生がいなくなりました。

1944年11月1日、B29が1機、東京に飛来（正確にはF13）しました。秋空の下で、私はビックリしました。1942年4月18日にB25が16機で爆撃して以来、初めての空襲警報の発令でした。1機のみが東京上空を飛ぶだけで爆撃はありませんでした。

5日、7日と空襲警報が発令されましたが、何事もありません。ただ、東京上空を旋回するだけでした。それは、空襲計画を立てるために約3,000枚の写真を撮って東京上空を偵察していたとのこと。私は3回の警報が発令される中、何も起きないので、あまり心配していませんでした。

しかし、11月24日に再び空襲警報発令。何もなさだろうと思っていたら、90機が飛来、爆撃を開始しました。第1目標は中島飛行機武蔵製作所（武蔵野市）でした。

B29を用いた初空襲であったため、111機が出撃しましたが、90機が東京に到達できました。雲が多かったこの日、目標に高高度精密爆撃ができたのは、90機中20機ぐらいだったそうです。



残りの飛行機は、第2目標の東京の市街地に爆撃しました。

同年11月27日の爆撃では、渋谷、江東、江戸川、港区に被害があり、怖い体験をしました。当時、私は学徒動員で、工場で働いていましたが、10機前後の編隊を組んだB29が、爆撃を開始したときは、頭上から雨が降ってきたような音がしました。最初はなんだ？と思いましたが、直ぐに爆弾だと気付いて防空壕に飛び込みました。その直後、付近に爆弾が落ちて、壕がグラグラと揺れました。幸いにも自分達の工場には爆弾は落ちず、隣の工場に落ちました。大変怖い経験でした。

当時の米軍は、戦略爆撃の基本に高高度精密爆撃を位置付けています。東京での第1目標は、大体が中島飛行機武蔵製作所です。この工場は、日本の戦闘機の8割のエンジンを作っていたために目標となりました。

高高度精密爆撃は地上10,000mからの高所爆撃のため、なかなか命中しませんでした。B29は日本へ富士山を目標に飛来し、富士山上空で東に進路を変更し、中央線沿いに東京へ、そして、千葉、九十九里を通り、サイパンに帰るというルートでした。しかし、日本の上空は、偏西風（ジェット気流）が吹いているため、大変なスピードになってしまい目標への爆撃が難しかったのです。

このような問題から、戦果が上がらなかった当時の爆撃司令官ハンセルは、効率的に爆撃を行うために無差別市街地爆撃をするように命じられますが、高高度精密爆撃で軍事施設や工場などの爆撃を主張して、拒否しています。そのため、1945年1月20日、ワシントンはハンセルを罷免し、新たにルメ

イ少将をB29爆撃司令官に任命します。ルメイ少将も当初、高高度精密爆撃を行っていましたが、戦果が上がらなかったため、夜間に超低空からの無差別市街地爆撃を行う考えへと変わりました。その最初の日が3月10日で、東京大空襲となったわけです。

B29について

B29は、当時、優れた飛行機で、翼の長さが43m、長さ30mと大変大きい機体でした。機銃は13丁で、大きいものは最後尾の機関砲です。これらの機関砲で、日本の迎撃機は撃たれ、多数撃墜されています。B29には、スーパーフォートレス（超要塞）という名があり、日本では「超空の要塞」と呼ばれていました。また、フォートレスという爆撃機はB17といい、ヨーロッパ戦線で活躍しています。つまり、B29とは日本爆撃用に開発された飛行機なのです。

当時の米軍の爆撃は、高高度精密爆撃が基本理念であったため、B29も高高度飛行ができるように、内部が気密室になっていて、軽装でも搭乗ができるようになっていました。

焼夷弾について

続いて、焼夷弾の開発の話です。それまでもM50とかM47という焼夷弾がありましたが、新たにM69という焼夷弾を開発しました。アメリカの国内に日本家屋の町を造りあげ、テストを繰り返して、このM69が一番有効だということで使用されました。他にももちろん使われましたが、3月10日の東京大空襲のときはM69がほとんどでした。

M69は、長さ約70cm、直径8cmの六角形の筒状をしています。円筒でないのは束にし易いためです。このM69を19発を束にして、その束を2つなげて1発の焼夷弾ができます。

つまり、1発の焼夷弾はM69が19発×2、38発で構成されています。

M69の中には、生ゴムをベンジンで溶かしたゼリー状のナパーム剤が入っていて、落下すると、それに火がついてM69の筒から猛烈な勢いが吹き出て、辺り一面火の海になります。叩いても、こすっても、消せません。

M69の一つひとつに3mぐらいの布がついていて、爆弾が横になることはなく、必ず縦になって落ちてきます。この布がブレーキの役割をして、日本家屋の室内に留まるよう工夫がされていたのです。この38発の束になっている一発の焼夷弾が、500m上空で締めているベルトが外れてバラバラに落ちてきます。つまり親子爆弾です。バラバラになったときにその布に火がついて、38発がひらひら落ちてくるため、地上から確認ができました。

原爆について

原爆投下の候補地は、新潟、横浜、京都、小倉、広島、長崎であったため、

これらの都市は、当初は、空襲を受けていません。(横浜は1945年5月29日にB29、500機、P51戦闘機100機の攻撃を受けています)また、球形のパンブキン爆弾で原爆投下の予行演習をしており、東京にも1回落とされています。

東京大空襲 3月10日 未明

ルメイの指揮で、人を殺傷することを目的に爆撃する無差別市街地爆撃が始まります。このため、人口密度の高い場所が第1目標となり、この日は、木場・本所・浅草・日本橋を結んだ5km四方だけを集中的に爆撃する計画でした。



1945年3月10日、0時08分、298機のB29から爆撃が開始されました。これまでの高高度からの爆撃ではなく、超低空(地上3,000m以下)からの爆撃に変わっていました。コースも、全く逆で、房総半島・東京湾から飛んできました。編隊を組まずに1機ごと1分おきに飛んで来ました。325機が基地を出発しましたが、東京上空には、298機でした。まず、数機が、木場・本所・浅草・日本橋の4ヶ所にM69より大きいナパーム弾を投下し、爆撃地域を定めました。

毎夜、数機が偵察に来て焼夷弾を落とすことが日課であったため、当初は空襲警報を出しましたが、その後は、警戒警報のみが発令されていました。なぜなら、空襲警報が発令されると、天皇陛下を起こし、防空壕に入っていたかなければいけなかったからです。少数機の場合は警戒警報だけで済ませようということから空襲警報が出なくなっていました。この日も、警戒警報でしたから油断をしていました。

夜中に低空を飛行機が駆け抜ける音が1分おきにし、母が外に出て確認したところ、火の手があがって焼けてくるとのこと。それを聞いて、慌てて外に出ます。いつも、地上10,000m上空のB29しか見ていなかったものが、地上1,000mのところを飛行する大きな機体が見えました。また、爆弾倉が空いているのを肉眼で確認でき、日本軍も機関砲で応戦していました。

私たち、親子3人は家の防空壕に逃げました。その防空壕は、頑丈だったために近所の人も集まっていました。空襲があまりに激しかったため、防空壕では安全ではないと思い、みんな逃げ場を求めて外に出て行きました。逃げ場がわからずにいた隣の母と娘も無理やり追い出し、通りがかった人々が防空壕の入り口に置いていった荷物を防空壕の中にしまい込み、家族3人で外に逃げようとしていました。

しかし、外は煙と火の粉で逃げられないため、再び3人で防空壕に戻りました。父は「外でバラバラに死ぬよりも中で一緒がいい」と。母は「ここで死ぬのは・・・」と。私は黙っていました。

そのうち、壕の前の長屋に火がついて、防空壕の戸にいろいろなものがドシ

ンドシンとぶつかってきました。この戸は、金属製ではなく、塩水に漬けた耐火木材を使用していました。鍵穴からも火がバーナーのように吹き込んできました。防空壕には飲料用の水があったので、戸が烧けないように水をかけていました。間もなく煙で息ができなくなってきましたから、布団の空気を吸ったほどでした。家族3人布団の中の少しの空気を吸っていました。しばらくして、外が静かになり、鍵穴から外を見ると、外はオレンジ色です。そこで、初めて、「助かった」と思いました。

空襲後

3月10日は、煙にまかれたせいか、ひどい頭痛で身動きが取れずにいました。翌11日に見た風景は壮絶なものでした。壕の前の川に浮かぶイカダも燃えているほど火が凄かったです。そのイカダや大通りには、多数の死体があり、それらの死体を片付けるのに1週間以上を費やしました。死体の山が遺骨になるまでには、2～3日燃えているほどでした。また、死体を片付けたアスファルトの上には人間の油が、黒く残っていて、なかなかとれませんでした。

私の家の防空壕に帰ってくる近所の人たちは、衣服が焼け焦げ、火傷を負っていました。特に、手の甲一面火ぶくれしている人は悲惨でした。返ってこない人もいました。隣組の34人の中で、一夜にして、11人が帰ってこなかったのです。また、最後に無理やり防空壕から追い出した母と娘さんも帰ってこなかったのです。私は長く追い出した責任を感じて、空襲の話をしませんでした。50歳前後から、話すことが親子の供養だと思って、話すことができるようになりました。

亡くなった人たちの荷物が防空壕に残りました。その中に、警報の度に壕に來ているお母さんと赤ちゃんのものがありました。中身はほとんどオシメなど、赤ちゃんのもので、涙を誘う荷物でした。

B29にはM69の親爆弾が30個積載されています。つまり、1機のB29に1,140発のM69が積載されていることとなります。それが298機ですから、木場・本所・浅草・日本橋を結ぶ5km四方に340,000発を投下したこととなります。(1km四方に14,000発)



大本營(3月10日12時)発表

「本3月10日、0時過ぎより2時40分の間、B29、130機。主力をもって帝都(東京)に來襲。市街地を盲爆せり。右盲爆により都内各所に火災を生じたるも宮内省(宮内庁)主馬寮(馬小屋)は2時35分、その他は8時ごろまでに鎮火せり。現在までに判明する戦果は次の如し。撃墜15機、損害与えたるもの約50機。」

まず、この発表は、來襲機数が大幅に違います。また、都民のことより先に、

天皇の馬小屋のことが発表されています。与えた損害については、米軍発表と近いです。米軍は、爆撃の際には、基地までの海上に潜水艦、水上飛行艇を点々と置いていたため、この日は不時着した40人を救助しています。しかし、助けられた40人は、10万人を殺して来た人たちです。

その後

米軍は、二日後に名古屋、その翌日に大阪を東京と同様の方法で爆撃します。大都市の空襲は6月半ばまでで、それ以降は、中小都市（鹿児島、四日市が最初）へと爆撃対象が移りました。

無差別爆撃の司令官、ルメイ少将は「もしアメリカが敗戦国だったら、いっしょに私が戦争犯罪人として裁きを受けるだろう」と言っています。自分のやったことがわかっているようです。

最後に

戦争のやり方に正義のやり方というのはないのです。ベンジャミン・フランクリン の言葉に

「良い戦争と悪い平和は、この世にあったことはない」という言葉があります。いい言葉です。戦争に良いのはなく、全部悪いのです。平和は、全て良いのです。

最後に、平和のために私たちは何をすべきかについて、若い人にぜひ伝えたい言葉がありますので、それを述べまして、終わりにしたいと思います。

これから言う文章は、私の勤務していた中学校の修学旅行の時に広島慰霊碑の前で、生徒が読んだ慰霊文の最後の部分です。この文章を私は名文だと思っています。これをぜひ、皆さんに伝えようと思います。

「今、平和のために私たちにできることは、

自然を大切にする。

一生懸命勉強する。

同じ人間を差別しない。

友だち同士お互いに助け合う。

そして自分自身の夢を大切にするなどです。」

これを私の本日の最後の言葉にしたいと思います。長い間お聴きいただきありがとうございました。

都市への無差別爆撃はナチス・ドイツによるスペインのゲルニカに対するものが最初（1927）日本軍は、中国の重慶に対して行ったものが知られている。（1938～41）

ベンジャミン・フランクリン

アメリカ独立戦争時の外交官、科学者としても知られている。

羽 村 市 平 和 都 市 宣 言

世界の平和は、人類共通の願いです。

私たちは、日本国憲法の平和の精神を守り、世界の人びとと手を携えて、戦争の防止と、被爆国としての悲惨な体験から、核兵器のない世界平和の実現に努めます。

平和と友愛の心を育み、多摩川の清流と、花と緑に恵まれた、この美しい郷土「はむら」を未来に引き継ぐことは、私たちの責務です。

羽村市は、戦後50周年にあたり、平和の誓いを新たにし、ここに平和都市であることを宣言します。

平成7年8月10日

羽 村 市

あ と が き

戦後60周年の節目にあたる今年度、先の大戦の悲惨な体験を風化させずに、恒久的な平和思想を普及啓発していくことを目的に、平成17年度羽村市平和啓発事業として、戦争体験記・平和への思いの作文の募集と平和啓発講演会を企画いたしました。

戦争体験記・平和への思いの作文の募集では、19名の方から寄稿をいただきました。今回の寄稿集については、寄稿者のご意向を優先させていただきましたが、万一、不手際等がございましたら、ご了承くださいませようをお願いいたします。

寄稿集の内容からは、悲惨な戦場での体験、疎開先での暮らし、東京大空襲での悲劇などを通じて、平和の大切さをあらためて認識したところです。

戦後生まれの世代が多く、戦争という事実が風化しつつある今、寄稿者の思いが多くの人に伝わり、恒久平和に繋がっていけばよいと願っています。

また、8月21日に実施した平和啓発講演会では、市内在住で東京大空襲を体験された西村信友氏に、「東京大空襲を語る～平和へのメッセージ～」と題した講演をお願いし、56人の参加を得ることができました。

西村さんは、昭和20年3月10日の東京大空襲での苦しい体験を中心に、戦争の悲惨さを語られ、参加された方々は、平和の大切さを再認識している様子でした。

今後も、羽村市は、平和宣言都市として、平和啓発事業の企画・実施を通じて、平和思想の普及啓発を図っていきます。

最後になりましたが、寄稿された方々、ご講演をいただいた西村さんには、誠にありがとうございました。

羽村市 企画部企画課

戦後60周年羽村市平和啓発事業
戦争体験記・平和への思いの作文寄稿集
平和啓発講演会記録

発行 平成18年2月
編集・発行 羽村市企画部企画課
所在地 〒205-8601
東京都羽村市緑ヶ丘5-2-1
電話 042-555-1111
FAX 042-554-2921
E-mail s101000@city.hamura.tokyo.jp



古紙配合率100%再生紙を使用しています